
視野2メートルの想い

人鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

視野2メートルの想い

【Nコード】

N3344K

【作者名】

人鳥

【あらすじ】

心に『欠陥』を抱え、『異常』を持つ彼らは用意周到なのか、行き当たりばったりなのか。人を想う気持ちは時に人生を大きく狂わせる。

前編（前書き）

『恋愛小説っぽいモノが書きたいな』と思い立って書き上げられたのが、この作品です。「っぽい」のくだりで分かるように、恋愛小説とは言えないものに仕上がってしまいました。

書き始めは本当に恋愛小説路線だったのですが、だんだんと物語がへんな方向に転がっていったんです。修正はしませんでした…。

『恋愛』の要素はほとんどないですね。どちらかといえば『友情』でしょうか。それもあまりありませんが。

一応ジャンルは『恋愛』で投稿していますが、この前書きをお読みの方で『恋愛小説』を読みたい方は、前の画面に戻ることを推奨します。

前編

光の奔流の中に、ぼくはいた。目が痛い。

風の闘争の中に、ぼくはいた。体がちぎれそうだ。

音の濁流の中に、ぼくはいた。気が狂いそうだ。

彼女の腕の中に、ぼくはいた。押しつぶされそうだ。

彼女の愛の中に、ぼくはいた。××××しそうだ。

ぼくは溢れる狂気を抑えるのに必至で、彼女は認識の外だった。

そのときは目も暮れていなかった。いたのは知っている。けれど、気楽に話ができるほど気持ちに余裕は無かった。思えば、それが間違っていた。彼女は強さゆえに弱く、しかし確実な強さを持っていた。きつとぼくが抱える狂気など、毛ほども問題にしなかったに違いない。

ぼくが彼女、霧崎時雨きりさき しぐれについて語る場合、必ず過去形で語ることになる。

……そのとおり。彼女は既にこの世にはいない。

ぼくは霧崎時雨が好きだ。

霧崎時雨はぼくが好きだった。

あなたを殺したぼくを、どうか許してください。

……どうか。

時雨は快活に笑いながらぼくの頭をはたいた。

「おーっす！」

はたかれた衝撃でぼくの頭がパソコンと接触しそうになる。

「……いたんだ」

「気付かなかった？」

「……いや、知ってたけどね」

ぼくは二分ほどでしたためた駄文を消去し、時雨に向き直った。

時雨は真つ白なパソコンの画面を指差した。

「その文章なに？」

「特に何も考えてないよ。なんとなく意味深にしてみたかった」

「ふうん？　じゃあ出だしはどう気持ちを表現したの？」

「それこそ無意味だよ。意味なんてない」

時雨は呆れたように笑った。本当に呆れられたのかもしれない。それでもまあ、仕方の無いことだろうとは思っけれど。

「冬麻ふゆまは一体何がしたいの？」

「何がしたいんだろうねえ。意味のない文字の羅列を作ること何かを整理しているのかもしれないよ」

「なにかって？」

「さあ？　無意識でやってることだし」

ため息をついて、時雨はベッドに飛び込んだ。やめてほしい。

「男臭い」

鼻をスンスン鳴らしながら時雨が言う。

「そりゃあ、ぼくのベッドだし」

「あたしが知らない間に大人になっちゃって」

四方山話が好きなおばさんみたいな口調だ。というか意味が分からない。……ぼくらさつきから理解不能な会話ばかりしてるよな。

大丈夫なんだろうか。主に頭。

「意味が分からないんだけど」

「うん。あたしもわからない」

馬鹿だ。

「失敬な！　冬麻だって似たようなものじゃん！」

確かにそうだった。失念していた。……うん？　馬鹿だということと否定しないのだろうか？　やっほう。ぼくらは馬鹿です。……あれ？　ぼくって今かなりイタイ奴だ。これは至急話題を変更する必要がある。

「さて、何の断りもなく人の部屋に入ってきた理由はなんだ？」

入って来ていたことは知っていたし、それ自体が悪いわけでもな

い。ただ用事があつて来たのなら、このままでは絶対に本題に入ることはできない。なぜなら、ぼくたちは日常の会話においてはこの上なく馬鹿だからである。

時雨は少し頬を膨らませ、悪く言えば幼稚な表情を作った。

「あたしと冬麻の仲じゃない」

「悪いとは言つてないよ。何か用事があるのかなって思っただけ」

「ぜーんぜん。用事なんてありませんよー」

「ふうん？」

時雨はベッドの上で体をくねらせ始めた。あまりそういう姿を男には見せないほうがいいのではないだろうか。結構工口い。

「……何してるの？」

「男臭いベッドを女の子の匂いで一杯にしてあげようかと」

大きなお世話だった。

「それってさ、たぶん時雨に男臭いのが移るほうが早いと思わない？」

時雨の動きが止まる。何かを考えているらしい。大方、サザエさんが次に出してくる手を計算しているのだろう。

「……それはそれでありかもしれない」

「ありなんだ……」

今度は布団を被り、その中で体をくねらせ始めた。もぞもぞ動く布団の上から乗っかかりたい衝動に駆られるが、ここは自重。その様子を見ることにする。が、ほどなくして布団が宙を舞った。

「息苦しい」

布団に潜り込んでいたのだから、それは当たり前のことだと思う。しかしそれを言うのは、何かが違うような気がする。

「女の子の匂いで一杯になった？」

「うーん、自分じゃわからないよ。……冬麻かもん」

時雨がやたら煽情的なポーズでぼくを誘う。こいつはぼくにどうしてほしいのだろう。まさかそういう要求をしているわけでもない。

「ほらー、嗅いでみるー」

近づいたばかりの頭を掴み、ベッドに押し当てた。もしかしたらこいつは酔っ払いなのかもしれない。だとしたら、こいつは相当酒癖が悪い。なにせ遊び感覚で友人を窒息死させようとしているのだから。

布団にはなるほど、確かに時雨の匂いがついていてた。ただまあ、すぐに消えてしまうのだろうけれど。

「はあはあはあ……時雨の匂いだあ」

「変態だったの？」

若干熱が引いた目でぼくを見る。自分から振っついてそれはないんじゃないだろうか。

「違うとも。変態という名の……」
以下略。

それからこんな感じでいちゃいちゃしていると、電話が呼ぶ声が聞えた。

「ちょっと待ってて」

部屋を出て、電話の子機を持ち上げた。

「もしもし、葵^{あおい}です」

「ああ、冬麻くん？」

電話の相手は時雨のお母さんだった。

「冬麻くんのところに時雨がお邪魔してると思うんだけど」

「ええ、来てますよ」

もうこの段階で、おばさんが何を言いたいのかがわかる。そして、なぜそれを言わなければならぬのかも。

「やっぱり……悪いけど帰るように伝えてもらえる？ あの子携帯に電話しても出ないから」

それはきつと、時雨が機械音痴の極みだからだろう。ぼくからすれば、彼女が携帯を所持していることがすでに奇跡だ。

「わかりました。伝えておきます」

「ありがとう。よろしくね」

通話を終わると同時にため息が出た。時雨の奴、また逃げ出してきたようだ。こういうところはいつまで経っても子どもだ。

部屋に戻り、寝転ぶ時雨にクッションを投げつける。

「くっ、曲者！」

バツと起き上がり、周囲を見回す。といつても、目に入る曲者らしき者はぼくだけだろうけれど。

「む？ 冬麻か」

他に誰がいるというのだろうか。そもそもここはぼくの部屋である。曲者という言葉が当てはまるのは、むしろ時雨だろう。

「それよりも時雨、また逃げてきたな？」

そう言った瞬間、時雨の表情がみるみる強張り始めた。ついでに顔から赤みが少なくなる。

「……もしかしてさっきの電話ってお母さん？」

「そうだよ。帰って来いってさ」

伝言すると、時雨は露骨に嫌な顔になる。

「だってさあ、あれ面倒くさいんだもん。それにあたしたち高校生じゃん？ いらないうって」

面倒くさいのは同意するけど、高校生であることは全く関係が無いと思う。君だってそうだと思う。……あ、これは家庭教師の話だ。

時雨は成績が悪いわけじゃない。ただ、放っておくと全く勉強しない時雨を見、時雨の両親が中一のときに雇ったのだ。結果的には時雨の成績は上昇し、学年トップの成績を収めている。その代わりに勉強嫌いに拍車がかかってしまった。

「お金も払ってるんだからさ。ちゃんとしないとったくないよ？」

「でも面倒くさい。勉強きーらーいー！ それにさ、始まる時間も問題だと思わない？」

「八時からだから良いんじゃない？ いたって普通だと思うけど」

ちなみに今は七時四十五分。もちろん夜である。こいつは時間など関係なくやってくるから対応に追われることが……あまりない。慣れた。

「じゃあ冬麻も一緒にしよう」

「なぜそうなる！」

意味不明なうえに、それは明らかに家庭教師の先生に迷惑だ。

「えーじゃー帰らない」

「いやいやいや、帰ろうよ。そろそろ先生来ちゃうよ？」

時雨は枕に抱きついて丸くなった。そして懇願するような目で見つめる。目を潤ませるサービスつきだ。ときめかないけれど、ぼくは時雨に歩み寄り、枕を抱く腕に触れた。

「ほら」

時雨は何を思ったのか、ぼくの手を取った。好機である。その手を握り返す。

「さあ時雨帰ろうか」

時雨を無理やり立たせ、半強制的に歩かせる。

「とーまの鬼畜ー！」

「おばさんに怒られるのは嫌だしね」

玄関までやってきて、ぼくはあることに気がついた。この女、今まで送らないと絶対に舞い戻ってくる。今の時間は七時五十分。八時まで十分しかない。迷う時間は無かった。

「ほら、行くよ」

「おつ、やっと一緒にやるきになった？」

「うん、ぜひ一緒にしたいね」

完全に嘘だが、こう言わないと家から出ることすらしないどころか、靴すら履かないだろう。

家を出て夜の道を歩く。昨日から今日の夕方まで雨が降っていたから、もしかしたら霧が出ているかもしれないと不安だったが、霧は出ていないようだ。もし出ていたらぼくは時雨を突き飛ばして、部屋のベッドでうずくまっていただろう。

それはさておき、霧埼家と葵家は近い。あまり雰囲気味わっている時間はない。ないのだが、こういうのは案外楽しいものだ。それが何年も付き合ってきた幼なじみであっても。普段と違う状況は、

不思議な魔力を持っている。と思う。

「実は家庭教師から逃げるために来たんだね？」

五分ほどの時間を潰すために聞いた。聞かなくてもわかる質問である。けれど、やっぱり会話はあったほうがいい。

「もっちゃんさ」

「なぜそこで誇らしげなんだ！」

わけがわからない。さっきは似たようなものだと言っていたけれど、絶対に時雨を理解に苦しむ人のほうがぼくよりも多いに違いない。

「冬麻は塾とか行かないの？」

「行かないよ。行く必要もあまりないし」

クラスの連中の中には、塾に通う奴もいるらしいが。勉強なんて基本的に学校でする勉強で十分だ。家で少し復習すれば事足りる。少なくともぼくは。それに、時雨も。学年トップの成績である以上に、全国でも上の中に位置するくらいだし。

「嫌味に聞えるよ、それ」

「そうかな？ 普通ってのは人それぞれの基準の上で成り立っているから嫌味にはならないと思うけど」

「それって暗に『君たちとは立ってるフィールドが違う』って言うてるようなもんじゃん？」

「あー……なるほど」

そういう考え方もあるわけか。危なかった。時雨から指摘されなければ、ぼくはクラスの嫌われ者になるところだった。危ない、危ない。

「でもまあ、必要性を感じないってのは同感かな。あたしは別にいい学校行つていい会社に就職したいわけじゃないんだもん」

「そうなんだ」

「うん。あたしさ……」

最後は呟くように言つたため、聞き取れなかった。何を言つたのか気になつたけれど、聞かないことにした。きっとその方が良かった。

たと思う。

霧埼家の家が見えてきた。家庭教師の先生はすでに到着しているらしく、霧埼家のではない車が止まっていた。

「うつげえ……もう来てるよ」

舌を出して、うなだれてみせる。

「先生嫌いなのか？」

「好きじゃないねえ……いや、教え方はいいんだけど、なんかあたしとは合わないわ。何年経ってもそれは変わらないね」

家庭教師って信頼関係が重要なんじゃないだろうか、と思ったけれど、よく考えてみれば信頼感が零ならすでに契約が破棄されているだろう。今まで変わらずにいるということは、（逃げ出してはいるけれど）、時雨もある程度は信頼（信用？）しているようだ。こういうことが何度もあるから、ぼくも先生とは会ったことがある。温厚そうな男性だった。時雨はあの人のどういふところがあわないのだろう。聞かないけど。

霧埼家のインターフォンを鳴らす。すぐにおばさんが出てきた。

「あらあらあら、送ってくれたんだ。ありがとねえ」

「今日は冬麻も……」

「いえいえそれほどでも。それではお邪魔にならないうちにぼくは帰ります」

時雨が何か（おそらくぼくにとって不都合なことを）言いかけていたのを遮り、ぼくはおばさんに頭を下げた。

時雨は大いに驚いたらしく、立ち去ろうとするぼくの両肩をつかみ激しくゆすった。ああ……脳震とう起こしそう……。

「冬麻も一緒にするって言ったじゃん！……——っ！まさか嘘？」

「信じるほうもどうかと思うよ」

まずは常識的に考えよう。それが幸せに生きるコツの一つ。

「うーわー！とーまに騙されたあ！一緒にしよーよー！」

高校生でしょ？その駄々のこね方はどうかと思うよ。というか

駄々をこねること自体何か間違っているような気がする。思うだけで言わないけれど。見てて面白いし。先生を待たせているおばさんですら、ぼくたちのやりとりを楽しんでいるくらいだ。案外先生も聞いているのかもしれない。

「いくら幼なじみでも限界はあるよ……」

「何言ってるのよー。一緒にお風呂入った仲じゃん？」

「何年前の話だよ」

しかもそれは、親が子ども（この場合は幼なじみの子どもたち、さらに詳しくするなら男女）をからかうときに使う常套句ではないか。しかもそれを女の子のほうから言ってくるあたりタチが悪い。きつとおばさんの教育の賜物だろう。思うことすら怖くて思えないけど。

時雨はぼくの反応など気にする様子も無く、腕を引っ張っている。それほど力は強くないとは言え、痛いものは痛い。

「はいはい（わがまま言わずに）、がんばろーねー」

「うん。（二人で）がんばろー」

前向きな言葉が聞けたと思った途端、腕を引く力が強くなった。時雨がどんなふうにもぼくの言葉を変換したのかは知らないけど、どうやら二人で頑張る方向で一致したらしい。どんな思考回路をしているのだろう。親の顔が見てみたい。目の前にいるけど。

ぼくはこれが限界です。ほらおばさん、笑ってないで助けて。

「時雨」

ぼくの念が通じたのか、おばさんが助け舟を出してくれた。ありがたい限りだ。感謝感激雨あれ。

「佐々木さんに悪いでしょ。冬麻くんだって困ってるし」

「お母さん「々」が多いよ」

何か変だと思っていたら、案の定間違っていたらしい。

「噛んだのよ」

人の名前を噛むのもどうかと思うのだが。

「それはさておき、もう八時だから行くよ」

がっしりとおばさんに腕をつかまれ、時雨はずるずると家の中に引きずり込まれた。

先生が家の中にいるからか、特に非難めいたことは言わなかったけれど目だけは同情を誘っていた。しなかったけどさ。

とりあえず家に帰ろう。

どうせ帰ったら妹の出番になるのだろう、とため息をつきながら。

葵家の両親はいわゆる仕事人間で、幼い頃に母がいてくれたことしか覚えていない。今は共働きでほとんど家にいない。妹は甘えた記憶すら曖昧だろう。全然覚えていないのかもしれない。今日は帰ってくるだろうか。少しばかりの期待と、別に帰ってこなくてもいいか、という投げやりな気分を胸に玄関のドアを開ける。

両親は今日も仕事からは帰ってこないようだ。ちよつと妹には悪いことをしたかな、と思いつつ階段を上がる。いや、あいつだってもう中学二年生だし、親離れしてもいい年頃だ。あと兄離れも。

「おっかつえっりー！」

我が妹、夏鈴かりんがご近所の迷惑も考えず、大きな声を張り上げて、階段を上り終えたばかりのぼくに横から飛び掛った。少し後ろにも傾いた。非常にでんじゃらす。

「あつぶねーだろ！ 階段付近で飛びつくな！」

脇腹に頬ずりをしている夏鈴を引き剥がし、自室に向かう。ベッドにダイブすると、まだ時雨の匂いが残っていた。甘い匂いだ。

「お兄ちゃんひどい！」

当然のように夏鈴もついてくる。

さっきにも述べたとおり、夏鈴の幼いころから両親は共働きで家に帰ってこないことは多かった。だからぼくは夏鈴の親代わりで、夏鈴はぼくに甘えていた。ぼくは小さい頃から母から家事を教わっていたし、一人でいることに慣れていたから平気だったけど。妹はぼくに甘えて過ごし、親の優しさも口クに知らないまま今に至る。

しかし、そろそろ兄離れの頃合ではないだろうか。妹萌えのライトノベルでもあるまいし。慕ってくれるのは素直にうれしいが、慕う気持ちが悪慕の情に変わりそうで怖い。可能性は低いのだろうか、最近はその本気で気がかりだ。

「兄に頼ずりだしな……」

ポツリと、思っていたことが口に出てしまった。

「え？　してほしいの？　いーよー」

夏鈴がベッドにダイブしてくる。それをギリギリのところで交わし、横たわる夏鈴に布団を被せ拘束した。呼吸の為に顔だけを外に出してあげる。

「おー。お兄ちゃんの変態性癖発覚。妹拘束癖、みたいなの？」

「馬鹿な。これは正当防衛だ」

どっちかというとお前のほうが変態チックだぞ？　妹よ。

「……あれー？　時雨ちゃんの匂いがするねー」

どうやら布団についた時雨の匂いに気がついたらしい。夏鈴は何を想像したのか、顔を赤らめた。

「ま、まさかお兄ちゃん……きゃーきゃーきゃー」

なぜ恥ずかしそうなんだ？　しかも少し嬉しそうだし。その身もだえをすぐさま止める。馬鹿なのか？　馬鹿なのか？　それとも馬鹿なのか？

「馬鹿だろ」

本音が出ていた。

「たった一人の妹に対してそれはひーどーいー！」

「実はもう一人、桜花という妹がいるんだ」

「え？　嘘？　何歳？」

「十六歳」

「わ、わたしにお姉ちゃんが……」

信じるなよ。

「嘘だけどね」

「はう！　お兄ちゃんに騙されましたー！　純情な乙女心を蹂躪さ

れましたー！」

「そんな人に聞かれたら誤解を招く表現を……！　っーかお前は純情な乙女だったのか？」

「そこを疑問視しないでよー」

みの虫状態の妹には、残念ながら純情な乙女的要素は皆無だった。合掌。とりあえず合掌。もう一度合掌。

「あ、そうだお兄ちゃん」

夏鈴はみの虫状態のまま言う。この状態を受け入れている時点で、お前は完全に純情じゃない。阿呆だ。

「お風呂空いてるよー」

いや、言われなくても知ってるし。家にいるのは二人だろ……

…？　違うのか？　そういえば見慣れない靴があったような。あれって夏鈴が新しく買ったわけじゃなかったのか？

「そりゃ、お前が入ったならあいてるだろうよ」

「うんにゃ、実はみーちゃんが泊まりに来てるのだー！」

にへっと、夏鈴は笑う。なんとなく、ぼくは部屋の入り口を見た。そこには長髪が綺麗な夏鈴の友人、火神^{かがみ}みいこが立っていた。

「お邪魔してます。……仲がよろしいんですね」

火神——あ、こう呼ばれるのは嫌だったか——みいこちゃん（年下の女の子は絶対に「ちゃん」付けで呼ぶことにしている。ただし妹以外）は、曖昧な笑顔を浮かべた。絶対に誤解されている。見ず知らずの他人ならまだしも、妹の友人でありぼくとも何度も会話をしているうえ、なかなかの美人（重要）であるみいこちゃんに誤解されたままにしておくのはいけない。なぜなら、次に会うときから冷たい視線を向けられるからだ。そうでなくても、普段の視線でも凶器になりうるのだ。それだけは絶対に回避しなくてはならない。

「とりあえず落ち着いて話そうか」

「それは構いませんが……」

思ったよりも冷静なようだ。少なくとも会話をしてくれるくらいには。「不潔だ！」とか言って、そのまま絶交となったら本気で泣

ける。

みいこちゃんはずつとぼくの横を指差した。

「まずは夏鈴さんを解放してはどうでしょう？」

確かにそうだ。というかお前も素直に捕まってるなよ。解放するタイミングを逃したじゃないか。と、責任を夏鈴に転嫁してみる。少し虚しかった。

夏鈴を解放し、場所を夏鈴の部屋に移した。そのほうがみいこちゃんも落ち着くだろうというぼくかなりの配慮だ。久しぶりに夏鈴の部屋に入ったが、なんとも女の子な部屋だった。

「……で、みいこちゃんはどこから見てたの？」

聞くと、みいこちゃんは言いにくそうにうつむいた。ぼくらってそんなに言いにくいことをしてたっけ？

「……えっと、夏鈴さんの帰りが遅いので様子を見に行ったら『純情な乙女心を蹂躪されました』って叫ぶ声が聞えて、声がしたのが冬麻さんの部屋でしたから、失礼かと思いつつ覗いてみるとあの状態で……」

『あの状態』というのは、夏鈴みの虫形態のことだろう。……最悪な場面だけを見ていたようだ。あの曖昧な笑顔もうなずける。というより、笑顔になれたことがすごい。普通ならドン引きして逃げ出すだろう。少なくとも時雨なら……いや、アイツの場合は参加してくるな。うん。あいつは参考にならない。

「それは基本的に夏鈴が悪かったりする。決してぼくの変態性癖の露見なんかじゃない」

「責任転嫁だー」

「違うわー！」

こいつは自分の兄を変態に仕立て上げるつもりなのか……。恐ろしい妹だ。

「どっちなんですか？」

困り果てた表情で（普通ならばくのほうを信じそうなものだが）首を傾げる。うん。かわいいぞみいこちゃん。

「ぼくが言ってることが真実だよ。全幅の信頼をおいてもらって構わない」

「言い切るお兄ちゃんかけー。参りました。ははー」

兄にひれ伏す妹がいた。正直やめてほしい。

夏鈴が降参したことでみいこちゃんの誤解は解いたけど、よく考えれば夏鈴が変なことを言わなければこんなことにはならなかったはずだ。夏鈴め、自重しろ。ぼくがみいこちゃんに嫌われたら、それはお前のせいだからな。たとえ否定しても、絶対にぼくはお前のせいにしてやる。

大人気ない兄だ。

「それじゃあ、ぼくは風呂に」

ここは一度引いたほうがいいだろう。あまり強調しても嘘っぽい感じがする。

立ち上がり、夏鈴の部屋を出る。

「暇だったら来てねー」

戸を閉めた後、夏鈴がそんなことを言った。ぼくは返事をせずに風呂へ向かう。

今日は疲れた。時雨に遊ばれ、夏鈴に遊ばれ。みいこちゃんには誤解され。まるでアニメやライトノベルのような一日じゃないか。自分がアニメ、もしくは小説の登場人物だと言われても、今なら信じられる。こんな疲れる一日を送る奴なんて、普通に考えていないだろう。せめて夏鈴が普通の妹なら、こんなことを考えることもないだろうに。

湯船に浸かると、じんわりと疲れが染み出していくような気になってくる。たぶん、入る前よりも疲れていつているのだろうけど。適度に入るならそうじゃないのかな？

風呂を出たらどうしようか。そのまま自室に戻って寝る。もしくは夏鈴の誘いに乗る。しかし、みいこちゃんはそれをどう思うだろうか。お互いに良く知った仲だから大丈夫かな？……いや、そんな甘い考えが関係（この場合は友人関係）を壊してしまうのかも知

れない。それ以前に、こんなことは考えるだけ無駄だろう。そのときの気分任せよう。きつとそれが最善の選択だ。

幸い今日は霧が出ていない。

結果的に、ぼくは今夏鈴の部屋にいる。先に断っておくけど、ぼくから部屋に行ったわけではない。寝ようとしていたところを、夏鈴に無理やり起こされ、挙句部屋まで引っぱり張られたのだ。抵抗？そんなことをして夏鈴が怪我をしたらどうする。

ぼくが再び部屋に現われ、みいちゃんは少し驚いていた。そうだろう。普通こないよな。

「冬麻さんは明日学校なのではないですか？」

みいちゃんは時計を確認して、それからカレンダーを見た。

「だよ」

中学は明日休みらしい。臨時休校だそう。中学で臨時休校は珍しいな、とは思ったが、職員たちに何か用事があるのだろう。

「お休みにならなくて大丈夫でしょうか」

心配そうな表情でみいちゃんは続けた。

「夏鈴さんに無理やり連れてこられたのならお休みになったほうが時刻はまだ九時半を少し過ぎたころ。寝ようとしたこと自体がおかしい時間帯だ。今時九時に就寝する高校生はいないだろう。いたとしてもごく稀だ。」

「大丈夫だよ。いつもこの時間は起きてるから」

「そうですか」

「そーそー。どうせいつも十二時過ぎまで起きてるから安心していいよー」

それを知っているということは、こいつは最低でも、ぼくと同じ時間までは起きているということか。せめて十一時には寝ろよ、中学生。

「夏鈴さん、夜更かしは健康に悪いですよ？」

「えー、だって寝るのつてもつたいくない？」
もつたいないって……。

「どういうことでしょう」

夏鈴は得意げにうなずいてみせた。

「寝るとさー、寝ている間のことはわからないし、気づいたら次の日じゃん？」

「そうですね」

「するとさー、たとえば十二時から七時まで寝ていたとして、七時間は自分は寝てるわけじゃん？」

「そのとおりです」

「もつたいくない？」

「何がですか？」

「何がだよ！」

どういう理屈でもつたいないとぬかしているのだ、この娘は。

みいこちゃんと声が重なる。夏鈴は一度息をついて、自信をみなぎらせた表情で指を立てた。

「寝てる時間がもつたいないのだよー」

「わからないですね」

「……お前、実は馬鹿だろ」

寝ている時間はいわば充電の時間。貴重で重要な時間なのだ。それなのにそれをもつたいないなんて言うなんて。

「わたしはねー、眠らなくてもいい体質になりたいのだよー」

満面の笑みで天井を指差す。ぼくの妹はこんなわけのわからない少女だったのか。素直に泣ける。

「わたしは眠れないと精神的に苦しいと思いますが」

「え？　どゆこと？」

天井を貫くように掲げられた指を下ろし、夏鈴は疑問符を頭の上に掲げた。みいこちゃんの言うことが全く理解できない、そんな表情。

「苦しいことがあっても、眠れないからずっとそればかりを考えて

しまう。みんなが眠っている時間に一人で過ごさなくちゃいけない。孤独ですよ?」

「そうだな。夏鈴知ってる? 真夜中に一人ってのは、結構辛いんだよ」

「んー。でもやっぱりもったいないなー」

何が『でも』なんだろう? こいつ全然わかってない。みいこちゃんも頭いいのに、どうして友達のこいつはこんなに馬鹿なんだ。関係ないか。

みいこちゃんは苦笑した。その表情はどこか楽しげだった。案外、こういう夏鈴の馬鹿っぷさをみいこちゃんは気に入ってくれているのかもしれない。そんな気がした。

「つと悪い」

ポケットに入れたままになっていた携帯のバイヴが鳴った。確認してみると、相手は時雨だった。『霧埼時雨』の名前がディスプレイに表示されている。

「電話ですか?」

「うん」

「こんな時間に……。どうぞ、夏鈴さんはわたしが相手しておきます」

「頼むよ」

『こんな時間に……。』という言葉から、みいこちゃんが礼儀に厳しいことがよくわかる。基本的に夜の九時以降に電話をすることは非礼に当たるのだ。

「もしもし?」

「やつぽー冬麻。冬麻に裏切られたけど、あたしは戦い抜いたぜ?」
「そんなに嫌ならおばさんに言えばいいのに」

正直な気持ちを伝えると、時雨は盛大にため息をよこした。

「言って止めさせてくれると思う? あたしが家庭教師を始めるようになったきつかけから考えてありえないっしょ」

「ありえないね」

きつかけは時雨の不勉強、勉強嫌いだ。それなのに面倒だから嫌だ、という願いが聞き届けられるはずも無い。というか、どんなきつかけであれ『面倒だから』というのは理由にすらならないだろう。理由にはなっても、決め手にはなりえない。

「あたしの戦いはこれからのさー。はあ」
ため息。

「頑張りなよ。ってこれほど無責任な言葉も無いね……………」

こういうときは、なんて言えいいのだろう。自分の語彙の少なさが恨めしい。それほど深刻に考えなくちゃいけない話の内容でもないのだけど。

「いやいや、そんなに深刻にならないでよ。要するにあたし次第なんだから」

「そう言ってくれとありがたいよ」

本当に。家庭教師をサボるって言い出さなくてよかった。

「さってー、今から行くよ？」

「は？」

「行くよ？」

「来るなっ」

ぼくの周りは馬鹿ばかりなのか！ どうしてこんな夜中に遊びに行こうという気になるのだろう。そしてどうしてそれをぼくが許可すると思っているのだろう。はなはだ疑問でならない。

「えー、いいじゃん。……夜のいと——」

通話を終える。ぼくは何も聞いていない。ぼくの家に時雨は来ない。時雨は勉強を終え、これから風呂に入って寝る。そうだ。そのとおり。そうに違いはない。間違ってもうちにはこない。別に『夜の……』に動揺したわけじゃない。ただ、もし仮に本気でその気だとして（十中八九冗談だろうが）、この家には夏鈴とみいこちゃんがいるのだ。おいそれと呼べるわけがない。しかもみいこちゃんは礼儀だとか、世間的な常識に厳しかったりする（ぼくの偏見）。呼べない。

「おばさんが止めるだろうけどね」

結論を述べ、ぼくは夏鈴の部屋に戻った。

「戻ってくるということは、ここでの生活が楽しいというわけですか？」

「別にここで生活してるわけじゃないよ。それに誘ったのはお前だろ？」

「何か用事があるなら無理をなさらなくても……」

「いやいや、そういう意味で言っただけじゃ」

こういう勘違いをするあたり、みいこちゃんも中々天然なのかもしれない。

「わたしとみーちゃんとで対応違わくない？」

「妹とその友達とで対応が同じなら、それはそれで問題だと思うぞ？ どっちに合わせるとしても」

「問題、なのでしょうか？」

改めて問われると、どうにも答えにくい。

「なんて言うか、普段ぼくが夏鈴と接しているようにみいこちゃんに接したり、みいこちゃんに接しているように夏鈴と接したりするなんて、ぼくにはできないよ」

前者は明らかにみいこちゃんに失礼な気がするし、後者はなんとなく気恥ずかしい。

「なるほど」

ゆっくりうなずいた。納得してくれたのだろうか。というより、理解してくれたのだろうか。

「そういえばさ——」

この話題を続けるのはそろそろ厳しくなってきたので、話題の転換を図ってみる。

「——どうして今日は泊まり？」

「勉強会という名目です」

「名目なのだー」

名目、と少し強調して言ったのは、最初から勉強などする気はな

いということか。

「一応勉強道具は持ってきているのですよ？ 何も持ってきていなかったらすぐにわかりますから」

「手が込んでるね」

「当然の努力です」

努力をする場所が間違っている気がするのだが。まあ、十人十色ということだ。

うん。ちよつと意地悪してみよう。

「よし、嘘はいけないから勉強しようか」

時間にはまだ余裕がある。どうせ泊まりなのだから、少しくらい夜遅くなったところで問題はないだろう。朝食を作るのはほくだし、ぼくが寝坊しなければそれでいい。

二人は思ったとおり、蠟人形になったかのように硬直してしまった。みいこちゃんのこういうリアクションは結構レアなのではないかと思う。心のダイアリーに写真と一緒に記しておこう。

「えとみーちゃん、あそこの喫茶店なんだけどねー」

「ええ、コーヒーがおいしいお店ですよね？」

「こらこら。勝手に話を変えるんじゃないよ」

現実逃避を始めた二人を現実に戻すと、まず夏鈴の不満がぼくに襲い掛かる。

「だってさー、おかしいじゃん？ せつかく泊まりに来てるんだから遊ばなきゃ損だよー」

「同感ですね。そもそも、夏鈴さんとはかく、わたしは成績に不安はありませんよ」

「今平然とひどいこと言ったよね！」

「あら、すいません。口が勝手に」

「そっか。なら仕方ないね」

仕方なくないだろ！ やはり夏鈴は馬鹿だ。まあ、前向きな考え方をすれば、追求するよりもそうしたほうが雰囲気的には良好であるから、あえてそう言ったとも考えられる。そこまで考えていない

だろうけど。みいちゃんのほうは完全に冗談だろう。

「そういえばみいちゃんってどれくらいの成績なの？」

みいちゃんは人差し指をあごの下に添え、んー、と唸った。

「今回のテストでは八百点満点中、七百五十二点でした」

「みーちゃんって平均点九十四点もあるんだー」

こいつ、平均点計算するの速いなっ！ 無駄なところで賢い妹だ。

「ちなみに夏鈴はどうだったんだ？」

夏鈴と比較しようとして、まだ聞いていなかったことを思い出した。いつも自分から言ってきたことから推測するに、今回は若干悪かったと見える。

案の定、夏鈴は言いくそうにぼくたちに目配りをしてから、おずおずと合計点だけを端的に述べた。

「六百六十七点」

まあ八十三点といったあたりか。そんなに言いくくするような点数ではないと思うのだが。もしかしたら、少しずつ点数が下がってきているのを気にしているのかもしれない。

「まあ、中学校は小学校みたいにはいかないさ。百点を取れないことを嘆くよりも、平均点を下げないように頑張ることが、合計点が下がってきているときには重要だ」

それができたら苦労しないのだけ。

それができたら、中学校での成績格差は生まれないのだ。

高校も然り。

「それをできる人が成績のいい人、なんですね」

みいちゃんがそれを言ってしまったら、夏鈴に対する嫌味に聞えてしまうのだが。夏鈴がそれを自覚していないので、まあよしとしよう。……みいちゃんってほんとに同じ匂いがするな。なんというか、自分が気づかないうちに嫌味っぽいことを言ってしまう辺り。そして、気づかないうちに友達が減っていくタイプ。

「というわけで、わたしは今日勉強する必要性はないと思います」

「そーそー」

「ほう？ それは中学校から現在の高校二年に至るまで、平均点九十五点以下になったことがないばくに言える言葉なのかな？」

ほら、今のも無意識で出た言葉。ああ、ぼくはきつと陰で嫌みつたらしい、陰険野郎とか呼ばれているのだろう。そんな風景が心に浮かぶようだ。

「冬麻さんって、成績がよろしかったのですね」

意外そうな表情でみいこちゃんが言った。

「がり勉って呼ばれてたよ」

日常会話でそう呼ばれていた。今思えば、これって軽度のイジメじゃないだろうか。よくぼくは暴れなかったものだ。まあ、やばそうな時は学校休んでたから回避していたのだろうけど。

「では——簡単に勉強の仕方だけを教わりたいですね。今後、参考にさせてほしいです」

「おー、みーちゃん真面目ー」

「こら夏鈴。真面目をチャカしちゃ駄目だろう」

軽く小突いて、みいこちゃんの言うとおり、ぼくは自分の勉強スタイルを二人に教えた。

夏鈴は全然駄目だった。

みいこちゃんは、思ったとおり最後までちゃんと聞いていた。

どこまでも対極な二人だ。

十時半に差し掛かったころ、ぼくは自室に引き上げることにした。

「もう寝るの？」

「いや、まだ寝ない。そろそろお友達二人の時間にしたほうがいいかと思って」

「それもそーだね。おやすみー」

こいつ……っ！

「おやすみなさい」

「おう、おやすみ」

みいこちゃんいだけは『おやすみ』を返して、ぼくは自室に戻っ

た。

今でも忘れない。

その日は霧の深い日で、ぼくがおかしくなる原因となっただろう日。少なくとも、ぼくはその日を境におかしくなった。

数日間降り続いた雨の影響で、濃い霧が立ち込めている。この地域は元々霧が発生しやすい地域だから、それも仕方のないことだ。ぼくは、夏鈴と一緒に土手沿いを歩いていて、霧はぼくたちにとって、日常の一部でしかなかった。だから、危ないという認識も無かった。幼いころだったから、ぼくたちは手をつないで歩いていて、ぼくが小学四年生。夏鈴が小学校に入ったか、入っていないか、という頃。

ぼくたちは襲われた。初めてこの身で感じた《悪意》と《狂気》だった。今思えば、ぼくの今の状況は、この二つの狂った感情にぼくが毒された結果なのかもしれない。

今見ているこの景色が夢であることはすぐに理解できた。何度も見た夢だ。

夏鈴は泣いていて、ぼくは泣くのを必至に堪えて、助けを求めている。

大人の人が通りかかって、ぼくたちは保護された。

犯人は男で、動機はなく、通り魔だった。ちなみにほかの被害者はなく、危うく第一の被害者になるところだった。

夏鈴もこの日のことは覚えているらしい。

忘れないよね、ホント。

三人前の朝食を作り、二人分をラップで包んで置いておく。

学校の準備を済ませて、登校を開始。自転車にまたがり、早朝の空気を全身に浴びながら、見慣れた風景を駆けていく。今日も霧は

ない。いい気分だ。

ぼくにとって非常に都合がいいことに、自分の成績相応の高校が自分の地元に存在していた。遠くまで通うのを億劫に感じていたばかりにしてみれば、これは非常にうれしい。しかし、ぼくが気に病む必要は一切ないのだが、成績がよろしくない連中は、遠くの学校に行かなければならず、苦勞しているようだ。

「よーっす」

「うっす、恭介^{きんすけ}」

後ろから一台の自転車がぼくを追い抜いていった。同級生の経島^{ふみしま}恭介だ。恭介はぼくの数少ない友人の一人で、真剣に遊びを楽しむやつだ。

恭介またがる自転車は、すぐにぼくと距離を離し、角を折れてそれから見ることはなかった。

再び自転車を見たのは、学校の駐輪場だった。

靴を履き替えて教室へ向かう。

「まだまだ冬麻には負けんぜ？」

ぼくの背中をバンバンと叩きながら、恭介が笑う。

「恭介と競争していたつもりは一切ないけど」

「馬鹿め。冬麻、お前馬鹿め。あの状況で、なぜレース感覚になれない」

「どうしてあの状況からレースをしようと思いつくんのだ」

それって小学生くらいの発想じゃないのだろうか。

「そういう固定観念が人の想像力を奪っていくのさ」

そう言われるとそういう風な気になるが、本当のところはそうなのだろうか。違うような気もするし、そのとおりのような気もする。これはきつと、ぼくがうまく煙にまかれた、ということなのだろう。

「ま、とりあえず今日一日を生き残ろうぜ？」

たかが高校の授業で大げさな友人だった。

ぼくは帰宅部であり、放課後に学校に残り、何かをするなどということは一切しない。それがいいことなのかどうかはさておいて、ぼくは誰かと話すこともなく、一直線に我が家へと歩を進める。

帰り道、一人自転車をこいでいると、どうしても部活をしている連中が目に入ってくる。それを少しばかり羨ましながら、中学からの愛車をこぐ。

部活に入ったことはない。

入ったら絶対に迷惑がかかる。

思わずため息がこぼれる。

「霧がなけりや、ぼくだって部活やるのにな」

そうでなくとも、霧がそれほど発生しない地域、気候なら大丈夫なんだけど。残念ながら、ここはなぜか霧が発生しやすいようだ。ぼくは自然界から嫌がらせを受けています。

それについての相談窓口は設けられていないのが残念だ。自転車をこいでいると、道の先に見知った姿を発見した。

「時雨」

「おー、冬麻。今日も早いね」

時雨の隣に並び、自転車を降りる。

彼女は徒歩通学なのだ。

「まあ、帰宅部だし。でも、時雨って部活入ってたんじゃない？」

「今日はお休み。元々練習はあつてないようなものだしね」

「練習って何してるの？」

「んー、雑談しながらお茶飲んで……」

『あつてないようなもの』というレベルの話じゃない気がする。

「あたしの部活忘れた？ 全校親交部だよ？ 我ながらよくまあ、こんな案が通ったと思うよ」

「……そうだね」

全校親交部。

その名の通り、『学年の壁を越えた交流をしよう』ということを

コンセプトとした部活、というよりも同好会のようなものだ。同好会としても存在意義があるのか疑問だけど。練習とはつまり、別学年との交流（談笑）であり、一般的な部活動とは一線を画している。ぼくが校長なら、絶対に存在を認めない部活動であるのだが、どういうわけかこの校長はそれを認めている。いわく、『それは素晴らしい案だねえ。いいじゃないか。一般的な部活から離れ、そういう斬新な部活動…… かどうかは怪しいけれど、それを企画するなんて。問題行動に注意してくれるなら、この案に反対するつもりはないよ』だそうだ。寛容すぎやしないだろうか。

「冬麻も暇なときに顔出してみなよ。入部届けもその他必要書類は全くないよ」

「無いんだ」

「うん。だって面倒でしょ？」

時雨はニツと笑う。

「部員がいないのに部費は出てるの？」

「いんや？ 全然出てないよ。でも練習の終わりに二百円徴収してるから大丈夫」

「それ…… いいの？」

普通に駄目なんじゃないだろうか。

「校長も許可してくれたよ？」

「……………」

「というか、前に校長も来たし」

「——ッ！」

さすがに絶句するべく。

「なんか五百円も払ってくれたし」

ああもつ。『普通』なんて、そんなものは存在しない。

「まあ、気が向いたら顔出すよ」

「うん」

うれしそうに、使い古された表現だけど、花咲くように時雨は笑った。

「ただいまー」

玄関には夏鈴の靴しかなかった。どうやらみいこちゃんはまだもう帰宅したらしい。

二階に上がる前に、リビングに入る。なにやら食欲を誘う香りが漂っている。母さんはまだ帰っていないようだし、夏鈴が何かを作っているのだろうか。

「おかえりー。へっへー、お兄ちゃん、わたしのおいしいおいしい手料理が食べられるのだよー？」

今日は珍しく夏鈴が夕食を作ってくれているらしい。普段は帰宅部で帰りが早いぼくが作っていたのだが（夏鈴が先に帰っていても）、どうやら夏鈴の気が向いたらしい。このまま料理に目覚めてくれないだろうか？　せめてぼくの帰りが遅いときくらいは作ってくれば助かるのに。それにしても、作り出すのが早いな……。

「慣れないことしてるしさー。失敗してもやり直しがきくようにと思ってる」

「なるほど。じゃあ、ぼくはとりあえず着替えてくるから。手伝うことあったら言って」

「あいあいさー」

元気な声が台所から聞えた。

自室に入り、荷物を置いて着替える。夕食の準備を始めようと部屋を出たところで、夏鈴が作ってくれていることを思い出した。

「こういうのも、なんかいいな」

妹の料理、か。どんな味なんだろう。

空いた時間に今日の授業の復習をしようとした矢先、夏鈴の呼ぶ声が聞えた。

「どうした？」

「いやー、失敗しなかったからさ、出来上がりが早くなっちゃって」
「……いくらなんでも早すぎるって」

まだ五時過ぎだ。いつもの食事の時間は七時。

「でもまあ、冷めちゃうのももったいないし、せっかく作ってくれたんだから食べようか」

「うんっ！」

夏鈴が笑うのを見て、食べることにしたのが間違いじゃないことを知る。配膳を済ませ、二人向き合う形で食卓を囲む（二人じゃ囲めないけど）。

「おいしいでしょー？」

自信満々でナイ胸を張っている夏鈴に促され、一口食べてみる。

「……む？　ちよつと味が薄いけど、おいしいよ」

夏鈴が作ったのは野菜炒めだった。分量がわからなかったのだから、二人前というには若干少ない料理が出来上がっている。まあ、食べる時間がいつもよりもかなり早いから、この分量でも十分事足りるだろう。そういう意味では、夏鈴の計算は完璧だったといえる。結果論だけど。

「薄かった？　たくさん入れたつもりだったのに」

「入れすぎのような気になるよな。ぼくも最初はそうだった」

作るのが二人前だから、最初のうちは入れすぎくらいが丁度いい。自分が入れている量は、味付けにしては少ないことが多いから。あまり入れるのを遠慮していると、あまりに薄い味になってしまうこともままあることだ。とはいえ、あまりに入れすぎると取り返しが付かないのだけだ。

「わたしも食べよー」

大皿というには少し小さい皿に盛られた野菜炒めに箸をのばす。

自分の箸に挟まれた野菜を少し眺め、夏鈴はそれを咀嚼した。

「うん、薄いね」

「味見してなかったのか？」

「うんっ」

なぜ誇らしげなんだ！

味見してないけど食べられる味でしょー、とでも言いたげな顔だ

けど、ぼくはそれを自慢できるようなことだとは思わない。が、夏鈴にとっては自慢できることらしい。本当にぼくの妹だろうか。こことくぼくと似ていない気がする。

「それにしても、夏鈴が作ってくれるなんて珍しいな」

余計なことを言ってしまった。もしかしたら夏鈴がすねてしまうかと思ったが、どうやらそんな心配は必要なかったようだ。

箸を野菜炒めにのばしながら夏鈴は、へへへ、と笑う。

「わたしも女の子だからねー」

「女の子だからって料理が作れないと駄目っていう道理もないけどな」

料理上手であることが大きなステータスであることは言うまでもないけど。それでも絶対必要不可欠、というほどでもないだろう。妻が料理が下手なら夫や子どもが作ればいいし、独身なら我慢したらいい。

「でもさー、できないとカッコわるいよー？」

「世間の目を超越してこそ、真の人間になれる」

「意味わかんないけどかけー。お兄ちゃんらぶー」

「らぶー」ってお前。ぼくの心配はますます大きくなる一方らしい。こいつにも早く好きな人ができないものだろうか。もしくはこいつを好きになってくれる人はいないだろうか。そしたらこのブラコンもどうにかなるだろう………と思う。まあ、それよりもまず、時折見せる夏鈴の異質を認めてもらわなくちゃいけないんだけど。

「らぶーって返してよー」

頬を膨らませて夏鈴はそう言う。

「………なんでだよ」

「あいさつだと思ってさー」

「らぶー」

はにかむように夏鈴は笑った。何か危ない気配を感じた。

「そうだ、夏鈴」

「うなー？」

「天気予報は今日見た？」

「んとねー、曇りの日があったり雨の日があったり。一応、霧に注意だよー」

さすが我が妹。ぼくが聞きたいことを一瞬で理解してくれる。

「なるほど」

「お兄ちゃんは繊細だからねー」

「アレを繊細で済ませる気か？」

「そうじゃないと救いがないじゃん？」

「……………」

「ふつつならここから引越すのが楽なんだろうけどねー」

「引越すのは嫌だよ。時雨をおいていけない」

「わかってるってー」

いつもと変わらない笑顔。

本当、ぼくといっつは真逆だ。

「時雨ちゃんも色々繊細だからねー」

「……………そうだな」

ぼくたちを取り巻く問題について話しているのに、どうしてこいつはこんなに笑顔なのだろう。ぼくがそれを聞くのは酷か。

「なるほど？ 繊細という言葉を使えば、なんとなく柔らかい印象になる」

「おー、お兄ちゃんわかってくれるかねー。…………でもさーお兄ちゃん」

ふざけた口調から、またいつもの口調に戻る。

「時雨ちゃんに隠したままでもいいのー？」

「……………」

「わたしや時雨ちゃんのはさあ言っちゃえば、言っちゃいたくないけど、自分自身の問題じゃん？ 時雨ちゃんは言うまでもなくわかるだろうし、わたしのは日常生活に問題ないし。でも——お兄ちゃんのは違うじゃん。それに別の意味では、時雨ちゃん自身も」

「それは……………」

「隠したままにしておくのもいいけどさー隠さず言っておく選択肢もあるよ。わたしはねー言っておかないと、いつか二人に大きな傷を残すと思うんだ」

大きな傷を残す、か。

全く、そのとおりだろうよ。

「……わかつてるよ」

「わかつてるんならいいよ。ごめんね、こんなこと言っぺこりと頭を下げ、夏鈴は笑った。

「いいよ。本当なら、ぼくが考えないといけないことなんだ」

「はは、お兄ちゃん素直でかけー。らぶー」

「……らぶー」

食欲は、完全に失せていた。

「じゃー今日はわたしが食器洗っておくよー」

「お願いするよ」

重たい足取りで部屋に戻る。

そのままベッドに倒れこんだ。まだかすかに時雨の匂が残っていた。

「時雨に話す、か」

幼なじみで、やはり問題を抱えた彼女を思い浮かべる。

「無理だな」

言えるわけがない。

こんな、下手をすれば社会不適合、人間失格のごとき性質など彼女に言えるはずがない。

あんな、今までのお前は間違いだ、と宣告されるに等しいことを、彼女に言えるはずがない。

『いつか二人に大きな傷を残すと思うんだ』

夏鈴の言葉が頭をよぎる。それでも、ぼくは話せない。

これはぼくの弱さだろうか……。

誰か、違うって言ってくれないかな……。

言ってくれないんだろうな。

夏鈴は幼い頃あまり笑わない娘で、怖がりでいつもオドオドしていたように思う。今はその真逆で、よく笑い、怖いもの無しで快活な娘。

妹の変化は一瞬だった。気がつけばそういう風になっていた。

二つの狂った感情に犯された夏鈴とぼく。泣きじゃくっていたはずの夏鈴は、いつのまにか泣き止み、あるうことが笑みを浮かべていた。ぼくはこのとき、正直言つと夏鈴におびえていた。それは周りの大人たちも同様で、母だけはそんな夏鈴を抱き寄せて優しく撫でていた。父は出張で海外にいた。母の目は優しい目で、全てを許容する寛大な意志と、何かを決意したような強さを感じた。

夏鈴は家に帰りつくと、普段からは考えられないほどの元気さでぼくにまわりついてきた。母はまだ家にいたそうにしていたけれど、上司がそれを許さなかったらしく、もの凄く心配そうにぼくたちを抱いた後、家を出た。今思えば、その上司は人として駄目なんじゃないだろうか。

あんな狂気に晒された後なのに、夏鈴は笑顔だった。今まででは考えられないほどに舌の回りがよくて、話していて楽しかった。気がつけば夏鈴に対する恐怖心は消えていた。

結局、その日のうちに母は帰ってくることはなく、ぼくたちは二人で一緒に寝ることにした。夏鈴は平気そうだったが、ぼくはまだあの男の存在を恐れていたから。

翌朝も霧は晴れていなかった。

ぼくの異常性が発覚したのはこの日だった。

今日は土曜日で学校は休みだ。ぼくには休みの日まで遊ぶ友人はいない。とはいえ、高確率で時雨が飛び込んでくるのだけだ。

「おっじゃまー」

「おじゃまします」

あれ？ 二人？

疑問に思いながら階段を下りる。一人の声は確実に時雨で、もう一人は聞き覚えのある声だったけど、誰かはわからない。

階段を下りると、気づかなかったばくを殴ってやりたい気分になった。

「丁度そこであつたから連れてきてみた」

「お、お邪魔します」

戸惑い気味にあいさつをしたのはみいこちゃんだった。

「夏鈴と約束あつたわけじゃないんだ？」

「え、ええ。角のスーバーの前を歩いていたらこの人に連れてこられて」

「ははは。見たことある顔だったから連れてきてみた」

見たことある顔って……。

「まさか、直接は面識ないの？」

「ないよ」

「ありません」

うわあ……、よくもまあそれで誘う気になるよ。そしてよくもまあついていったものだ。みいこちゃん、自分で気づかないうちに厄介なことに巻き込まれていそうだ。

「ちよつと夏鈴今寝てるだろうから起こそうか？」

ちなみにぼくもさつき起きたばかり。

みいこちゃんはぶんぶん顔を振って、ぼくを制した。

「わたしはこの人に連れてこられただけですから」

「あつ、それあたしが悪者みたいじゃん」

「違うのかよ」

「違う……とも言い切れないかも」

ははー、と乾いた笑いを漏らす時雨を軽く小突き、とりあえず二人を家に上げた。玄関で立ち話もアレだろう。別にみいこちゃんを

上げる必要もなかったのだろうか、まあ、今日ここに来たのも何かの縁だろう。

「へえ、火神みいちゃんかあ」

当然のように名前も知らなかったらしい。どうやって声をかけたのだろう。

「霧埼さん」

「時雨でもいいよー」

「時雨さんはどうしてわたしに声を……？」

言い直して問いかける。

時雨はわざとらしく笑う。

「はー、細かいこと気にしないの。ねえ、冬麻」

「なんでそこでばくに振るんだ？ まあ、どうせばくは常に暇人だからいつ誰が来ても大抵対応できるから問題ないけどね」

例えば今日みたいに突然二人がやってきても。外出も滅多にしないし。

「そういえば、みいちゃんって何か用事があったんじゃないの？ 外歩いてたなら」

聞くと、みいちゃんはふるふると首を振った。

「散歩してただけです。休みの日はいつも」

恥ずかしそうに笑う。

「ふうん」

「冬麻は休みの日っていったら惰眠貪ってるだけだから、少し見習ったら？」

「時雨だって似たようなもんだろ？」

今日こそ夏鈴より早く起きているが（ぼくはいつも大体八時には起きているから、惰眠貪つてると言われるほどでもない。夏鈴はいつも十時前後）、時雨は普段は昼ごろに起きる。ぼくにとやかく言える立場ではないのだ。

「あたしは八時に起きてるもんねー」

「それはぼくだよ。時雨はいつも昼ごろだろ」

言い合っていると、みいちゃんがとても不思議そうな顔でぼくたちを見ていた。

「どうしたの？」

はじかれたようにみいちゃんの体のはねた。

「えっ、あ、いや、ええとお二人ともよく知ってるなあ、と」

まあ、確かに普通なら他人の起床時間なんて知らないよな。

「まあね、こいつとの付き合いも長いし」

じたばたする時雨を押さえつけながら、苦笑交じりに。

「はあ……」

得心しかねるように曖昧にうなずいた。それから少し悩むような表情になる。

「お二人はもしかし——「おっじゃまーっすー！」

みいこちゃんの言葉に重なるようにドアが乱暴に開けられる音がして、乱暴に階段を駆け上がってくる音が聞えてくる。バタバタ、ドダドダ、効果音はどうでもよくて、問題なのはぼくは誰も呼んでないことで、アポ無しでぼくの家に来るのは時雨くらいのものだ。

「誰だ？」

部屋のドアを開けようとした時、思いっきりドアが引かれた。ノブを掴もうとした手は空を切った。

「おっす冬麻」

ドアを開けたのは級友、経島恭介だった。

「何でお前がここにいるんだ？」

勝手に上がりこんできた友人に対して出た最初の言葉がこれだった。

「馬鹿め。冬麻お前、馬鹿め」

「馬鹿はお前だ」

「まあまあ、とりあえずお茶どうぞー」

恭介が起こした騒音で目覚めた夏鈴がお茶を出す。丸いテーブル

を、ぼく、かりん、時雨、みいちゃん、恭介の五人が囲んでいる。普通ならいないはずの人間が一名。

「どうも、お気遣いなく」

さやわかなスマイルを振りまき、恭介はお茶をすする。ほう、と息をついて床に倒れこんだ。

「おちつくわー」

「頼むから落ち着かずはどうして来たのかを言ってくれ」

「おーそうだった」

体を起こして、もう一口お茶をすする。周りの連中全員が注目しているというのに、こいつのこの余裕は何なんだ。本物の馬鹿か、それとも本当に余裕なのか。

「理由は二つ。きっかけは一つだ」

「きっかけから聞こうか」

「散歩していた。これが全ての始まり」

「だろうな。で？ 散歩からどうなった？」

「一つ目の理由だ。実は散歩じゃなくてサイクリングと呼ぶべき行為だったわけだが、気づいたら冬麻の家の近くに来てたから——」

「待て、ぼくの家近くに来ていること自体おかしくないか？」

「そうか？ 小学校から同じ学校通ってるんだぜ？ 家もそれなりに近いし。おかしくはないと思うけど」

あ、そういえばそうだった。

「悪い、続けて」

女性陣はじつとぼくらのやりとりを聞いている。それがどういう意志によるものなのかはわからないけれど。

「近くに来てて、『冬麻は起きてるかなー』と思い、外から見るだけ見てみようと思ったわけだ」

「ほう？ それをする必要性がわからんがな」

「まあね。そこらへんがオレのオレたる所以だぜ。で、オレは見てしまったんだ」

「何を……？」

ぼくの家にはそんな深刻になるようなものはないし、今朝はそんな深刻になるようなことはしていない。これといった秘密もない。あるとしたら……しかし、それは絶対に有り得ない。

「見ちまっただよ……女の子が二人、二人も冬麻の家に入っているのが！ 一人は霧埼だつてわかつただが、もう一人が全然わからなくて、しかもかわいじゃないか」

「それが一つ目の理由か？」

「おう」

さつと時雨とみいこちゃんのほうを見てみると、時雨はいつもと変わらない表情。みいこちゃんは赤くなっていた。ぼく個人の意見を言えば、みいこちゃんは『かわいい』というよりも『きれい』とか『美人』に属すると思う。

「まあ、ツツコミどころもあるがひとまずおいといて、二つ目の理由は？」

「ああ、これは至極単純なんだ」

「というと？」

「ああ、オレはとてつもなく暇だった」

自慢げに胸を張る恭介が、殴つてやりたいほどに腹立たしい姿だったということは言うまでもない。

「つまりあれか？ 暇だからチャリで走ってたらぼくの家近くまで来てて、何となくさらに近づいてみたらこの二人がこの家に入っていくのを見つけ、元々暇だったお前はこれ面白そうと思って入ってきたと」

「おう」

「それにしても時間が離れてますね。わたしたちがここに来た時間から」

黙って聞いていたはずのみいこちゃんからの鋭い指摘に、恭介は面食らったようだが、すぐにいつものヘラッ、とした表情に戻った。「それはね、とりあえず汗を落着かせたかったのと、喉が渴いていたからさ」

「お前は汗をかいて、喉が渴くほど必死にチャリをこいでたのか……」

「それもあるし、冬麻の家に二人も女の子が入るのを見たらそうなる」

「どういつ体の構造をしているのだろうか、こいつは。」

「それはさておき、きみ、名前は？」

「ずっと聞きたかったのだろう、恭介の目は玩具を前にした子どものように輝いていた。……四歳年下でも気にしないんだな、こいつ。素晴らしい精神だよ。みいこちゃんがどう思うかは謎だけど。」

「火神みいこ、です」

警戒心をたつぷり言葉にしみこませていた。しかし、恭介は意に介した様子もなくさわやかな笑顔を振りまいていた。こいつ、ウツゼエ。

「みいこちゃんか。よろしく」

「よろしく」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……、おい」

「なんだ？ 相棒」

「ぼくはお前の相棒じゃないよ。もう恭介の目的は達されたはずだけど、帰らない？」

恭介は大いに動揺し、ずざざざー、と音が出そうな勢いで後ずさる。

「お、おま、お前って奴アー！ 馬鹿め。冬麻お前、馬鹿め」

「あの、言いにくいのですが、あなたのほうが馬鹿っぽいです」

「おー、言うねえみーちゃん」

「みいこちゃんは正直なんだね。あたしとは大違いだ」

女性人の明るい雰囲気の中に混じりこんでいる辛辣な言葉に、さ

すがの恭介もダメージ

を受けたようだが、そこは恭介、すぐに立て直した。

「お前にこんなハーレムな状況を楽しませるか。せめてオレにも体験させてくれ。ていうか、お前霧埼と付き合ってるんだから他の女の子とよろしくやってんなよー」

へ？

「なんだ？ 間拔けた面してよ……。ばれてないと思ってたのか？
すでに霧埼から聞いてるぜ？」

無意識のうちに夏鈴に視線を向ける。夏鈴は苦笑いしていた。

「だってさー、冬麻ってシャイだからあたしにも心開いてくれないもん」

「開いてくれないもん、て」

「な、正直に言っちゃえよ。楽になるぜ？」

「あ、あのっ」

突然みいこちゃんが声を上げる。一同の視線がみいこちゃんに集まる。

「わ、わたしもうそろそろ帰らないといけませんので」

「あ、もうこんな時間か」

時計を確認すると、もう十二時が近づいていた。昼食の時間なのだろう。

「し、失礼します」

「ばいばーい」

暢気な恭介の言葉を背に、みいこちゃんはぼくの部屋を出、その後を夏鈴が見送った。

時雨と恭介は何を話していたのか忘れたのか、それ以上追求してくることは無く、ほどなくして恭介も帰っていった。

時雨も帰り、いつもの兄妹二人の時間になる。

「危なかったね、お兄ちゃん」

「……………」

「あんな唐突に選択を迫られるなんて、思ってもなかったんじゃない？」

笑顔。しかし、言葉だけは真剣。

恐怖も、

悲しみも、

怒りも、

ほとんど欠如してしまっているから。

あるのは、楽しさ。

感情がないわけじゃなくて、そういう感覚はあるけど表現ができない、らしい。

「……………そうだな」

こういう時の夏鈴は、全てを知っているように話す。知っていないくても、わかってしまうのかもしれない。

「いつでも答えられるように、違うね、いつ聞かれても戸惑わないように、早く選んだほうがいいよ」

「そうだな」

「あははー、お兄ちゃんって問題が山積みだね」
笑い事じゃないのだけど。

「そういえばさ、お前、いつも『お兄ちゃん、お兄ちゃん』言うてるのに、さっき平気そうだったな」

「えー？ だって、アレが紛い物だってことくらいわかるし。それに」

「それに？」

「お兄ちゃんは、わたしのものだよ？」

今までここまでハッキリ言われたことがなかった。

いつもと変わらない夏鈴の笑顔に、しかし、ぼくはさっきの発言を後悔した。

全ては霧が悪い。

全ての発端は、霧の日のあの事件。

ぼくは霧崎時雨が、どうしてあんな状態になってしまったのかは知らないけれど、何かしらの原因があるのだと思う。霧崎時雨に聞けば早いだろうけど、彼女自身、覚えてはいないだろう。すくなくとも、間違いを自覚するまでは思い至らないに違いない。

ぼくは霧を嫌悪する。

夏鈴は霧に無関心だ。

もし、ぼくの願いが叶うなら、あの日に戻してください。

ぼくは家で夏鈴と遊びます。

「ただいまー」

「おかえりー。また冬麻くんの家行つてたの？」

「うん」

「……そう。じゃあ、ご飯できたら呼ぶからね」

「はい」

幸い今日は家庭教師がない日。

昼からはどうしよう。また冬麻の家に行こうかな？ それとも買い物に行こうかな？

それにしても、夏鈴ちゃん邪魔だなー。あのブラコンどうにかしないと、冬麻が本当にあたしだけのものにならないじゃん。あ、でも、殺したりしちゃ駄目だよ、あたし。殺すのは犯罪だし、殺しちゃったら冬麻悲しむもん。それに、あたしは冬麻の彼女。あんなブラコンよりもアドバンテージあるから安心。安心なのかな？ だって、一日中一緒にいるんでしょ？ 大丈夫かな。大丈夫かな。大丈夫かな、大丈夫かな、大丈夫かな大丈夫かな大丈夫かなだいじょうぶかなだいじょうぶかなだいじょうぶかなダイジョウブカナダイジョウブだよ！

「あー、まあ、今日は佐々木が来ないからいいか。あたしには彼氏

「がいるっつーの」

顔を思い出すだけでも嫌になってくる。冬麻の写真見よー。そして、
「たらしあわせだー」。

アルバムを開いて目的の写真を探す。去年に撮影した写真で、あたしが冬麻の肩に抱きかかっている写真だ。照れたような、困ったような冬麻の顔が愛おしい。

よし決めた、昼ごはん食べたら冬麻の家に行こう。あたしはあたらしく、恋っばいこと、純愛みたいなことをやってしまっんだ。
暴力反対。

さあ、家を出よう。

あのブラコンがいないことを祈りながら。

後編（前書き）

後半です。

当然ですが、これで終了です。

楽しんでいただけたら幸いです。

後編

その日、前日の出来事を夢だったと言い聞かせながら、ぼくはカーテンを開けた。霧がまだ晴れてない。

ぞわり、とぼくの体を何かが這ったように感じた。もちろんそれは幻覚で、何も這ってはいない。ただ、この感覚は昨日の狂気に似たような感じがする。

この日も両親はいなかった。仕事に出ているのだ。もう慣れていた。ぼくはそのまま部屋で過ごしてしまおうと、ベッドに寝転ぼうとしてなぜか、机の上に積み上げられていた教科書の山を思いつきり崩していた。それを契機に、ぼくは部屋のありとあらゆるものを破壊しようと試みていた。

ぼくを止めたのは夏鈴だった。いや、夏鈴しか止められる人間はいなかった。

夏鈴はとても必死な顔で、けれど、泣き方を忘れてしまったような複雑な笑みをたたえていた。ぼくは夏鈴を殴ってしまい、ぼく自身が落ち着いた後、何度も何度も謝ったことを覚えている。

某日、自宅。

このところ雨がぱらつくようになり、霧が出ないだろうかとハラハラしている今日この頃だ。ふつつなら霧が出ないところでも、この地域なら出る。

ベッドから起きるのが何となく億劫で、怠惰にベッドに寝そべっている。今時雨が来るのは何となく嫌だなあ、なんて思っていたらドアが開いて時雨が入ってきた。

「おっはよー冬麻」

「ぼくは睡眠中です」

「そっかー。じゃあ、あたしは静かに寝顔を見ていよう」

「ああ、そうしてくれ」

「って、返事してるじゃん！」

今更か……。

「冬麻ー、起きろー」

力の限り体を揺さぶられ、起きたくなくても起きてしまう。……

今日は本気でゆっくり過ごしたかったんだけどな。色々考えなくちゃいけないこともあるし。

霧の心配もあるし……。

「まあ、冬麻寝ててもあたしには関係ないけど。勝手に色々いじって遊ぶだけだしー」

「やめてくれ！」

思わず起き上がる。やましいものは決してないけれど、それでもやはりいじくり回されるのは勘弁してほしい。

ぼくの反応がうれしかったのか、時雨は本当に楽しそうに笑っている。意地悪な笑みだった。

「おはよ」

「……ああ、おはよう」

「もう九時半だよ」

「あのなあ、いくらぼくでも寝坊くらいするときだってあるよ」

時雨はぼくの話の聞いているのかいないのか、ぼうつとぼくを見ている。

「どうしたの？」

「え？ ああ、うん。あのね、あたしたち付き合い始めて結構長いけど、まだキスってしたことないよね？」

「……………」

絶句する。それは別に照れとか、そういう甘酸っぱい感情による絶句ではない。まずいことになった、という切羽詰った絶句だ。

「ねえ、付き合ってるなら、キスくらいしてもいいと思わない？」

「……………それは」

「？ どうしてそんな深刻そうな顔してるの？」

心配そうにぼくの顔を覗きこむ時雨。

「時雨」

もう、これ以上は無理だ。

「うん？」

「大事な話があるんだけど」

「……うん」

笑顔を消し、怪訝そうな目でぼくを見る。別れ話とも思ったのだろうか。あながち間違いじゃないな。

「ぼくたちは付き合ってなんかいないんだよ」

時雨から、表情が消えた。

ぼくが部屋で暴れたことは、すぐに両親に知られることになった。ぼくは怒られると思い身をすくめていたが、両親はそうはせず、何かを悟ったような表情をした後、ただ優しく抱きしめてくれた。今思えば、普段は家にいないが、この人たちは立派に両親やっているのだ。

夏鈴はぼくに殴られたことを両親には言わず、寝ぼけてベッドから落ちたのだと弁解した。両親がそれを信じたようには思えなかったが、何も追求はしてこなかった。

夏鈴はぼくに色々と質問を投げかけてきた。

何があったの？

どうして？

どこか具合の悪いところない？

結構痛かったんだけど、本気でわたし殴ったの？

などなど。

どの質問をぼくに投げかけるときも、夏鈴は笑顔で。

ぼくは、いや、ぼくたちは改めて自分自身とお互いの異質を感じあつたのだつた。

両親は何もぼくに聞かず、ただ学校に霧の日は学校を休むと連絡をしてくれていた。何も聞かないのが両親なりの優しさなのか、面倒なことからの逃避なのかはわからないけれど、ぼくにとってはそれは救いだつた。

聞かれても答えられないからだ。

時雨の表情が消える。

「冗談止めてよ、冬麻」

「冗談じゃないよ。こんな相手を傷つけるだけの冗談なんて言わない」

真実も、時として相手を傷つけてしまうけど。

「だって、だってだって……」

「時雨、勘違いなんだよ。きみの思い込みなんだ」

時雨の異質。

「嘘っ！　だってあたしがいきなり家に来て、迷惑そうな顔しなかったよ」

「ぼくたちは幼稚園に入る前からの付き合いだよ。そんなこと気になんてしないよ。それに、付き合っていないくても、そういうことは有り得ると思うんだ」

「前にパソコンに書いてたあの文章は？」

『ぼくは霧埼時雨のことが好きだつた』と、確かに書いた。けれど、そういう意味じゃない。

「確かに時雨の言いたいことは分かる。よくそんなことを覚えているね……」

今は突き放してしまわないといけない。中途半端に接してしまつたら、元の鞘に収まつてしまう。

「けど、あれは友達として、だよ。特別な意味なんてないよ。それ

に、あの時だつて特に意味はないって言つたはずだよ」

時雨の顔が歪む。両の目に涙を溜めて、いやいやと首を振る。

「思い出してみてくれ時雨……！　ぼくたちには付き合い始めるよ
うなきっかけはなかったはずだ。ぼくはきみに好きだと口で直接言
つたこともないし、きみはぼくと付き合っているんだと言い始めた
三年前から一度もキスも、手をつなぐこともしていない。ぼくらが
今やつてゐることは、昔から何も変わってないんだよ……」

「嘘嘘、うそ、だよ……」

「時雨……」

とうとう涙がこぼれる。時雨が泣いているのを見るのは何年ぶり
だろう。そんなどうでもいいことが頭をよぎる。

ぼくはどうすることもできず、時雨が泣いているのを見ているし
かなかった。

泣きやんだ時雨は、はれぼったい顔をぼくに向け、けれど何も言
わずに部屋を出て行った。

部屋に残され、今起こつた出来事を思い起こす。

本当にこれでよかったのだろうか。

「お兄ちゃん、とうとう話したんだね」

いつの間にか部屋に入ってきていた夏鈴が言う。

「……ああ」

「浮かない顔だね」

「だらうな」

「どこまで話したの？」

「全部は話してないよ。まだ早い」

「ふうん」

夏鈴は意地悪な笑みを浮かべた。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なに？」

「そろそろ素に戻っていい？」

「別に、こういう話しててもいつもどおりでいいよ」

変に真面目で冷静で、全てを知っているような夏鈴は、正直言々と不気味なのだ。自分の妹とは思えなくなる。とても異質なもののよう感じてしまう。

「いやあ、それじゃ駄目でしょー。雰囲気って大事でしょ？」

いつもの夏鈴に戻る。ニヤニヤしながらぼくに近づいてきて、そのままぼくの隣に座る。

いつぞやのように飛び掛ってこないのは、ぼくの気分が沈んでいることを理解してくれているからなのか。

「やっぱりここは居心地いいねー」

笑顔でぼくの顔を見上げる。不覚にも夏鈴の笑顔で少し元氣が出てきた。人の笑顔って偉大だよな……ほんと。

「……夏鈴」

「うん？」

「お前が妹でよかったよ」

「わたしはお兄ちゃんがお兄ちゃんなのはちょっと文句あるけどね」

ぼくのいい台詞が台無しじゃないか……。

あと、ちよつとシヨックです。

「恋人になれないでしょ？」

「ぼくのどこに好きになるところがあるのか疑問だけだね。それに家族って、同属嫌悪とか、そんなのあるもんだろ？」

即答できるようになつてきたあたり、ぼくも成長してきたのだから。 知らない成長ではあるけれど。

「駄目だなー、お兄ちゃん。自信持ちなよー、自信。自分の魅力は自分で気づかないと」

気づけないから色々疑問があるんだろうが。自分で自分の魅力に気づけたら苦労しないよ。

夏鈴が扇情的に体をくねらせ始める。とはいえ、ぼくは実の妹に発情するような変態さんではない。夏鈴の行動を少しばかり冷たい

目で見るのがせいぜいだ。

「夏鈴さ、それは絶対に他人の前でするなよ」

「え？ オレ以外の男に見せるなよ？ きゃー、お兄ちゃん大胆」
自分の都合のいいようにしか解釈しないのは夏鈴の特技だ。

「お前のこと心配して言ってるんだけどな……」

「へへー、わかってるよーそのくらい」

枕を抱いてぼくを上目遣いに見る。口元はどこまでも楽しそうに緩んでいる。それが異常から来る笑みであっても、笑顔はいいものだ。

さつきから笑顔はいいものだ、としか言っていないような気がする。気のせいだろう。

「お兄ちゃんは心配性だなー。わたしって実は家の外じゃ優等生で通ってるんだよ？」

「家でも優等生でいてくれていいんだよ？」

「わたしはお兄ちゃんにはありのままを見せるのー。飾った自分見せてメツキはがれたら駄目じゃん？」

「それは家の外でもだよ……」

ぼくの呟きが聞えたのか聞こえていないのか、相変わらず夏鈴はぼくを上目遣いで見つめている。

無意識のうちにぼくの手は夏鈴に伸び、頭を撫でていた。それも自分でも驚いてしまうほどに優しく。今まで夏鈴の頭を撫でたことなんて一度もない。

「お兄ちゃん？」

不思議そうな、けれど幸せそうな夏鈴の声。

ぼくは実の妹に発情するような変態さんではない。男女的な意味で好きにもならない。兄妹という関係からは一切逸脱しない。けれど、今この瞬間だけは少しだけ、逸脱していたのかもしれない。

妹を愛しむ心が芽生えた。

家族愛だと思いたい。

子どものころずっと疑問に思っていたことがある。これはあの日、つまりあの狂気に触れた日よりもあとのことだ。疑問とは少し違うか。不思議に思っていた、と言ったほうが近いかもしれない。

どうしてみんな怖くないんだろう、そうずっと思っていた。

誰かがいきなり襲ってくるとは思わないのだろうか。

どうしてあんなに無防備に、無警戒に歩けるのだろうか。

そう思っていた。

もう一つある。

どうしてもばくは霧を感じると自分を抑えられないのだろう、ということだ。

ばくが破壊衝動を抑えられなくなる、破壊衝動を覚えるのは、決まって霧の日だった。

翌日から、時雨がばくに話しかけてくることはなくなった。

登校の時間を変えたのか、通学路で会うこともなくなった。

学校で会っても、一言も交わさないようになった。

ばくたちは今まで、あの日のあの時間までずっと一緒だった。こんな形で決別してしまうのはもったいないし、きっと時雨だって望んでいないだろう。

もう二週間になる。我慢して様子を見るのも飽きてきた。

「行くしかないだろ」

行くしかない。

時雨が必ずいて、そしてばくを拒むことが不可能なあの場所へ。

放課後、ショートホームが終了すると同時に教室を出た。ありとあらゆる障害、先生が声をかけてくるとか、恭介がからんでくるとか、そういうことを避けるためだ。

早足で目的の教室を目指す。

家庭科室のドアに『全校親交部』と張り紙がしている。中から声が聞えてくるから、どうやら今日は活動をしているようだ。あとは時雨が部に出席しているかどうかだが、部長であり、全てを取り仕切っているあいつが休んでいるはずがない。迷わずにドアを開ける。

「おっ、今日は新入りかー？」

ぼくの入室に気づいた男子生徒が言った。

「友達からこの部の噂を聞いてね」

「へえ、噂って？」

「全校親交部っていうすごい楽しい部活があるから、行ってみたら？ 自由参加みたいだから、ってね」

「なるほど。まったくその通りだよ、さき、こっちきて座って」

男子生徒はぼくを快く受け入れてくれた。

そこで初めてぼくは視線をめぐらせた。男子二人と女子一人だ。女子は時雨で、もっとも上座といえる場所に座っていた。特に意味はないのだろうけど。

時雨はぼくと目が合うと、全く熱を帯びていない目でぼくを見、つうと目をそらした。そう簡単にはお話もできないらしい。

「で、名前なんて言うの？ 何年？」

男子生徒の隣に座ると、その男子生徒がかなり馴れ馴れしく声を駆けてきた。いや、この集まりの目的を考えれば当たり前のことか。

「葵冬麻、二年だよ」

「オレは新崎敦、一年ね」

一年？

「ここじゃあ、敬語禁止だから。先生が来たってタメ口だぜ。それから、苗字で呼ぶのも禁止ね」

「なるほどね。完全に対等の立場で、ってことか。苗字で呼ぶのと名前で呼ぶのはあまり影響無さそうだけど」

「そゆこと。まあ、名前で呼んだほうが、なんとなくいいだろ？」

「オレは錦淳、一年。よろしく」

「霧埼時雨。二年、よろしくね」

明らかに営業用の笑顔をぼくに向ける。

「うん？ 葵って苗字だっけ？」

「ああ、そうだよ」

「時雨が前に言ってた彼氏って冬麻？」

空気が凍てついたような気がした。時雨の奴、こんなところでも公言していたのか……。

「別れた」

「は？」

敦が素っ頓狂な声を上げる。淳は全ての動作を止め、硬直していた。

「別れた」

時雨はあくまで冷静に、そして冷たい声で言った。

「あ、ああ、そうなのか。……それにしても、冬麻よくまあ、そんな状態になってからここに來れたよな」

少し引きながら、苦笑交じりに敦がぼくを小突いた。

「まあ、別れたからって全ての関係を途絶えさせなくちゃいけないってわけでもないだろう？」

ここは時雨のほうに話を合わせておく。そのほうが時雨の体裁を守るにもいいだろう。

「案外女々しいのな」

「そういうんじゃないよ」

「だろうな、そんなふうには見えない」

「敦、その話題はもういいだろう。あまり続けたい話題ではない。続けるなら別の場所で、だ」

固まっていた淳が口を開く。

「そうだよ。まあ、冬麻もあたしに気を使わないでいいからさ」

形だけの言葉か本音か、ぼくには判断ができなかった。けれど、そう言った時雨の笑顔は本物だったように思う。本物であって欲しい。

「よし、今日は冬麻の入会記念だ！　ちよつとばかり派手に行くか！」

敦が声を上げる。うすうす感じていたことだが、こいつはどうも調子に乗りやすいタイプらしい。あまり不快ではないけど。

「却下だ」

「駄目だよー。予算ないし」

二人が同時にその案を退ける。敦はうろたえながら、

「お、おい、それってひどいんじゃないのか？　新入りだぜ？」

と、ぼくの背中をバンバン叩く。

「いや、一回に一人あたり二百円しか徴収しないなら、今のこれが精一杯だろ。敦、あまり無理言つなよ」

「うあ、なんか的確な批判受けたしっ！」

両手を広げて降参を示し、敦は机の上に並べられた皿からポテチをつまんで口に運んだ。

「あ、冬麻のジュースないね。淳お願い」

「了解」

淳は立ち上がって、家庭科室の備品のコップを一つ取り出す。それにオレンジジュースを注いでぼくの前に置いた。

「ほら」

「お、ありがとう」

受け取って一口だけ口に含む。

「それにしても、冬麻はアレだな。なんというか溶け込むのが早い」
淳が言う。

「そうかな？」

「ああ。初めてここに来た人は、大抵もうちょっと緊張している。時雨と知り合いだったから、というだけではないだろう？」

「いや、それだけだよ」

「ほう？　それはすごいな」

「すごいかな？」

「すごいさ」

ひどく落ち着いた一年だな。声も無駄に良い声だし。

ぼくが落ち着いているのはきつと、思ったよりも時雨に拒絶されなかったからだろう。ぼくが最も恐れていたのはそれだった。一言も話すことができなかったらどうしようと、そればかりを考えていた。時雨が完全に許してくれたとは思わなければ、緊張は少しほぐれた。

「いつもこれくらいの人数なのか？」

前に時雨から話を聞いたときには、もう少し人数がいるような印象を受けたのだけど。少なくとも五人くらいは常にいるように思っていた。

ぼくの質問に答えたのは、やはりというか、敦だった。

「あー、今日は少ない日だな。いつもなら、三年の凜と綾香あやかがいる」「ふうん、じゃあ今日は二人は来てないんだ？」

「ああ。まあ、自由参加だからいいんだけどな。休んだら次に来たときに会の規模が縮小してるだけだし」「費用が入ってこないからだろう。」

「凜と綾香は今年受験生だ。来る機会も減るだろう」

「そだよな。楽しい人たちだったのに」「淳と時雨がうなずきあう。」

「じゃあ、ぼくが今日来たのはある意味ではよかったのかもね」

「違うない」

はははは、と敦は笑う。

日が暮れて、辺りが暗くなるまで、全校親交部の活動は続いた。

同じ教室で同じ活動をし、同じ時間に終えたなら必然、ぼくと時雨は同時に学校を出ることになる。敦と淳に別れを告げ、ぼくたちは家路についた。

教室にいたときには違う気まずさ。

けれど、お互いに別れて帰ろうとはしなかった。ぼくは自転車を

押しているし、時雨は徒歩通学だ。

「どうして来たの？」

校門を出てしばらく歩いた頃、唐突に時雨が口を開いた。

「最近時雨が話してくれないからね」

「そうなるようにしたのは冬麻じゃない」

お互いにお互いの顔を見ない。前を見たまま話を続ける。

「そうなるようにした覚えはないよ。あれだって、いつかは話さないといけないことだった」

「笑ってたんでしょ？」

「は？」

「こいつは自分と付き合っていると勘違いしてる馬鹿な奴だって。妄想してるんじゃない、って。……笑ってたんでしょ？　ずっと」

自嘲気味に話す時雨の声は、怒っているというよりも寂しそうだった。

「笑ってないよ」

「……………冬麻に言われてさ、ずっと考えてたんだ」

「何を？」

「あたしはどうして冬麻と付き合ってるだなんて思ってたんだろう。なにがあたしをそういう妄想に取り付かせたんだろう。どうしてあたしはその妄想を本当のことだって、現実のことだって思ったんだろう。そんなことを考えてた」

そう話す時雨は、触ると消えてしまいそうだった。

「あたしのお兄ちゃんとお父さんが死んだときのこと、覚えてる？」

「……………うん」

事故だったらしい。家族で出かけた日の帰り道、道路わきの自販機で飲み物を買うために、時雨とおばさんは車を降した。時雨とおばさんの帰りを待つ、霧埼家の車に大型のトラックが追突。飲酒運転だった。そして、居眠り運転だった。ブレーキが踏まれたはずもない。霧埼家の車はそのまま飛ばされ、壁に衝突。トラックの運転手は衝撃で目が覚め、逃走。

これが中学一年の時。

トラックの運転手はほどなく逮捕された。

「事故の後、冬麻はあたしに優しくかった。突き放すことも、優しすぎることもなかった。適度な距離。適度な優しさ。うれしかった」

「……」

「あたしの心には穴が開いてたからさ、冬麻で埋めようとしたのかもしれない。付き合ってるんだ。好きあってるんだって思い込んで、時雨の異質。それはぼくに対する依存だった。最近は付き合っている、という形態をとることで少しだけマシになっていた。いや、周囲からは浮かないようになっていたのだが、それ以前はかなり酷かった。時雨の名誉のためにあまり細部は言わないけど。

時雨は立ち止まり、ぼくのほうに向き直る。

ぼくも歩くのをやめ、自転車があるから顔だけを時雨に向ける。

「ごめんね？」

「いいよ。ぼくときみが付き合っていなくなたって、何かが変わることなんてないよ。今までどおりでいい。勝手にぼくの部屋に入ってきたって、来る途中に見かけたみたいこちゃんを連れてきたって、勝手に冷蔵庫からジュースを取って飲んでも、宿題を写しにきたって構わない」

驚いたように目を見開いて、それから涙を溜める。

「あ……あたしって、そんなに図々しいかな？」

震える声で。

「うん。とっても図々しいよ」

幸せって何？

そんなことを聞かれたことがある。中学一年の時だ。当然そんなこと、考えたこともなかった。

ふと辺りを見た時に、幸せだ、って思える瞬間じゃない？

そう答えた。

質問をした相手は、

なら自分は今、幸せじゃないね。

そう言つて自嘲気味に笑い、ぼくをすつと見上げた。

不幸って何？

そんなことをぼくに聞いた。当然、そんなこと幸せについて考えるくらい、ぼくには縁のないことだった。

自分が不幸だ、って思つてしまった瞬間じゃないかな？

じゃあ、自分が不幸じゃないって思つたら、それはどんなことであれ不幸じゃないの？

きつとそうだよ。幸か不幸かなんて、主観でしかないんだから。じゃあ、幸せとも思えず、不幸でもないって思つていたなら？それは惰性で生きてるか、それか幸せなことを幸せだ、って思えていないか、どちらかだよ。

一日中、そんなことばかりを、中学一年生の男女は話していた。

ぼくの一日は、夏鈴と話すか時雨と話すか、その話す時間の割合で色が変わってくる。夏鈴と長く話したのなら、ぼくは家の外に対して関係を持つとしなかった日。時雨と長く話したのなら、ぼくが外に対して関係を持つとした日だ。一概にそうとは言えないけど、言えるわけもないけど、大体そういう感じだ。時雨と一緒にいたら、学校では時雨の友人と話すから。あと、恭介とも。

最近は全校親交部に出席する日が増えた。毎回二百円の出費があるのは、正直言つて痛いのだが。それでも、霧のせいで部活動に参加したことなかったぼくにとって、全校親交部は新鮮だった。このところ天気がいいので、霧の心配をしなくてもいいのがうれしい。

「……でよ。どう思うよ、淳」

「お前が悪い」

「時雨はどう思う？」

「うーん、敦が悪いと思うよ」

「……なあ、冬麻はオレの味方だよな？」

「味方してやりたいのは山々だけど、さすがに無理だよ」

「新垣先生は……？」

「全体的に敦が悪いと思う」

「うわあああ！ オレは陸の孤島にいるのかああ！」

何か間違っているような気がするが、訂正はしないでおう。

今日は新垣先生が来ていた。昨日は教頭が来ていた。本当に先生も参加するらしい。さすが全校親交部。なにも親交を深めるのは生徒だけに留まらせる必要がない、ということか。一応先生なので、呼び方は『先生』だがしかし、敬語は使用しない。

「陸の孤島の意味を間違えてるぞ、敦。明日までに辞書で調べて提出しろ」

「嫌だ！ どうしてこんなところで課題出されなきゃ駄目なんだよ！」

「おいおい、言葉遣いが……ここではそれがルールか……、まあいい。調べて覚えなおしておけよ」

「へいへい」

先生の参入は、決してこの部には悪影響にはならなかった。なぜなら、こんなところにやってくる先生なんて、物好き以外にいないからだ。この新垣先生も、その物好きの一人だった。聞くところによると、先生の中で一番よく来るのだそうだ。仕事の合間を見て、可能な限り参加しているらしい。この場に自然に溶け込んでいられるのもうなずける。

「あ、先生、そろそろ時間が」

時計を確認した時雨が言った。

「あ？ 本当だな。ちつ、仕事なんて面倒くさいものがどうしてあるんだ……」

生徒の前では言っではいけないようなことを呟きながら、新垣先生は立ち上がった。

「はい、会費」

「はい。確かに」

「邪魔したな」

「いつでもどうぞ」

定例のやり取りを終え、新垣先生は心底面倒くさそうに家庭科室を後にしたのだった。

先生には見えない先生を見送り、ぼくたちは顔を見合わせて笑った。

「あの性格どうにかしたらモテるだろうに。惜しいな」

ひとしきり笑った後、淳が同情するように言った。

「いや、あんな性格だからこそいいんじゃないか？ 美人だし」

「人に厳しく、自分に甘く。……敦、どこに魅力を感じるんだ？」

「あの男性っぽい言葉遣いと、外見のギャップ。それから、あの性格そのもの」

「お前……そのうち失敗するぞ」

「そうかな？ かつこよくない？」

クッキーをほおばりながら、時雨が話の輪に入る。

「かつこいい、ねえ……」

思わず呟く。時雨はああいう女性をかつこいいと思うわけか。

メモメモ（無意味）。

ぼくはジュースを飲みながら、三人がかつこいい女性について話すのを聞く。ぼくはいつも、基本的に会話には入らずに、みんなが話すのを聞いていた。

皿に盛られた、カントリーマミーを取って食べる。素朴な味わい。

「冬麻はどんな女の人がかつこいいと思う？」

「そうだな、新垣先生が自分にもう少し厳しかったらかつこいいかも」

「ほう」

「まあ、ぼくはかつこいい女性より、きれいで明るい人に惹かれるけどね」

その後も、本日の活動が終了するまで『かつこいい女性』についての議論は続いた。結論は出なかったけれど。

かつこよさ、なんて個人の主観によるものだから当たり前のことだけだ。

「それじゃ、えっと四日後」

「えー、休みの日は家に来るなってこと？」

「あ、いや、いつでもどうぞ？」

「ふふ、お邪魔します」

意地悪な笑みを浮かべ、時雨は家に入った。

「さて、帰るか」

学校帰りに時雨を家まで送ることが、最近日課になってきた。なんか付き合ってるみたいだな、と思い、二ヶ月前の時雨を思い出して身震いする。不謹慎な考えだ。

時雨を家まで送り、自分の家まで帰るこの時間はあまり好きじゃない。騒いだ後の虚しさ、というのだろうか。たった五分や十分の時間で、ぼくは一気にブルーになれる。これが素だったっけ？

「ただいま」

玄関には相変わらず夏鈴の靴しかない。両親は今日も仕事だ。両親は仕事場にすんでいるのか、家に住んでいるのか、どっちなんだろう。なんて、そんなことを言ったら両親は悲しむんだろうな。

「おかえりー！」

いつものように夏鈴がぼくに飛びつく。ぼくはそれをいつものように引き剥がす。

「最近帰り遅くてごめんな？」

「いいよー。料理の練習もできるし。部活、初めてでしょ？」

「ああ。ありがとう」

食卓には夏鈴が作った料理が並んでいる。焼き魚。酢の物。味噌汁。朝ごはんのようなメニューだけど、一切文句は言わない。今朝

食べたようなメニューだけど、それでも文句は言わない。これは夏鈴の『練習』なのだから。

「食べようか」

「食べよー」

魚は少し焼きがあまかった。もう少し焼いてもいい。

味噌汁はおいしくできていた。

酢の物もおいしい。

夏鈴の料理の上達は目覚ましいものがある。なんでもみいこちゃんや、みいこちゃんのお母さんから教わっているらしい。今度お礼を言っておかないと。

「おいしいよ」

「ほんと？」

「ああ」

はじかれたように笑い、上機嫌に箸をすすめる。

「なあ、夏鈴。今週の週末三連休だけど、どこか行きたいところないか？ あるなら連れてってあげるけど」

「あー、ごめん。今週は学校のボランティア活動に参加しなきゃいけないのだー」

「そうなの？」

「うん。土日は老人ホームで月曜には学校の掃除。学校の掃除は午前中。休日返せー」

「代休あるでしょ？」

「うん。三週間に分けて一日ずつ」

「逆に面倒だろうにね」

「だよー」

まあ大人ってのは、得てしてそういう理解に苦しむようなことをしてしまうものだ。ぼくたち子どもはそれに翻弄されるのが精一杯。

「食器、ぼくが洗っとくよ」

「ありがとー」

出された二人分の食器と、調理に使われた鍋やらグリルやらを洗

う。夏鈴は居間でテレビを見ている。ぼくも夏鈴が見ているテレビを見ながら食器を洗う。

全校親交部の騒がしさに慣れてしまったからか、こんな静かな時間が新鮮な感じがする。毎日繰り返してきているのに。

明日は金曜日。明後日から三連休だ。ゆっくり過ごそう。

「夏鈴、天気予報見た？」

「あ、見てないや。チャンネル回してみるねー」

リモコンを操作してチャンネルを回す。丁度天気予報を伝えているチャンネルがあつた。

「……です。今週の週末はお天気は崩れそうです。お出かけの際には傘を持っていたほうがいいでしょう」

「だってさ」

「ありがと」

週間天気予報では、土日が雨。月曜日は晴れになっていた。月曜日は霧に注意しなければいけない。

食器を拭いて食器棚にしまふ。夏鈴が寝転んでいる横に座って、一緒にテレビを見た。

「久しぶりだねー、こうやって一緒に見るの」

「そうだったっけ？」

「そうだよー」

テレビの中では、お笑い芸人がネタを披露して出演者たちを笑わせていた。

「うーん、イマイチだなー」

プチプチとチャンネルを回し、辿り着いたのは旅番組だった。

「おー、きれいだねー」

「どこの国かな？」

誰かは知らないけれど、俳優だろうの人が汽車から外の景色を眺めていた。その窓からは海が見え、はるかとおくには水平線が見える。青く透き通った海は、何もかもを許容してしまいそんな強さを感じた。

「あんなところで泳いだら気持ちいいんだろうねー」

「残念だけど、アレは間違いなく海外だよ」

旅人がその海の美しさを表現していたけれど、その表現は陳腐で使い古されていて、やっぱりぼくが思ったようなことと同じようなことを語っていた。どうやらぼくの思考も平凡らしい。

三十分くらいその番組を見た。

「先に風呂行つていい？」

「いいよ。わたし宿題終わらせるから」

「それじゃ、お先に」

バスタオルと着替えを手に脱衣所に向かう。脱衣所に置かれた鏡には、前よりも少し丸くなったぼくが映っていた。

「最近食べて飲んでするわりに動いてないからなー」

少しは運動もしないといけないようだ。太るのは勘弁願いたい。

自分の体に少々ばかりのショックを受けながら体を洗い、湯船に浸かる。一日の疲れが流れ落ちていく。あまりに気持ちいいものだから、少し長く浸かりすぎてしまった。

「長かったねー」

風呂から上がると、すでに宿題を終えたらしい夏鈴が笑顔でぼくを迎えた。のぼせた頭を振り、

「風呂には魔物が住んでるらしいね」

そんな冗談を言ってみる。

「ははは、お兄ちゃんみたいなのを狙ってるんだねー」

夏鈴はぼくの横をすり抜けて風呂に行った。

「ぼくはおっさんにはまだ早いよ」

誰にも聞えない呟きを吐いて、ぼくは牛乳を飲むのだった。

正直、よろしくしたくない状況だったということは否定のしようがない。塞ぎこんだ人間が、幸せとか、不幸とか、そんなことを問いかけてくるのだ。それも、自分と同じ歳で幼なじみが、だ。本当

は逃げ出したかったし、突き放してしまいたいと思っていた。それをしなかったのは、ぼくがその幼なじみが大切だったからだ。失いたくないと思ったからだ。

適度な距離を掴むのは簡単だった。相手の表情を観察することは慣れていた。ぼくの異質が他人にばれないように、ずっと他人の表情をうかがって生きていた。特に霧が晴れた次の日は。夏鈴の異質に気づいた人たちがいないかを確認するのも、ぼくの仕事だった。これは自主的にやっていたことだけど。

その幼なじみはほどなくして回復し、普通に普通の、中学生がするような会話をできるようになった。

回復は順調だった。

ただ一つ。

現実とは異なる、自分を擁護するための虚構を作り出した、という事実を除いては。

日曜日、雨が降っている。

金曜日に全校親交部で、日曜日に遊びに行こうという話になっていたのだが、昨日から続く雨のせいで計画そのものが流れてしまった。それ自体は、まあ残念なのだが、退屈というか暇なのはいつものことなので気にならない。

夏鈴は今頃老人たちと戯れているのだろう。掃除をしているのかもしれない。とにかく今日は夏鈴は家にはいない。久しぶりに一人の時間を過ごす。今までは暇だとは言いつつも夏鈴がいたし、唐突に時雨がやってくることも多かった。

「本当に一人の時間ってのも、いいのかもしれないな」

なんて、そんなことを思う。こういうときにアレがくるなら、誰も傷つけずに済むのだが。予報では明日から晴れるらしい。霧が出ないことを祈るばかりだ。

引っ越し、という選択肢が頭をよぎる。しかし、ぼくはそれをし

たくないのだ。霧が出やすい地域とはいえ、ここでの生活は気に入っているし、まだ異質のことが解決したわけではない時雨を残していくわけにもいかない。現実を認めたように見えて、恐らくまだ時雨は虚構の中の情景を現実で見ている可能性がある。

時雨の異質のというのは、『葵冬麻と付き合っているという虚構を現実に見ている』ということではなく、『葵冬麻に対する異常な依存』というところにある。だから、ぼくに振られても（あくまで彼女の中では）、また別の方法でぼくと一緒にいようとする。近くにいたいと願う。これはぼくのうぬぼれではなく、真正正銘の事実だ。そんな時雨を残して、どうして引越しができようか。両親にも何度が勧められたが、ぼくはその全てを断った。

雨足は弱まる気配を見せない。それほど強い雨でもないから、やっぱり予報どおり明日には止むのだろうけど。ぼくは霧は嫌い——というより忌避の対象——だけど、雨は実はそれほど嫌いではなかった。なぜなのかはよくわからないけれど、子どものころから雨のことが嫌いだと感じたことはなかった。晴れた日とあまり好感度は変わらない。

「災厄の前触れだったのにな」

呟きがもれる。一人になるとどうしても独り言が出てしまう。
「なにしようか」

どうせ一人なら、一人のときでしかやりにくいことをしよう。

五分に及ぶ思案の結果、勉強をすることにした。普段の休日は夏鈴やら時雨やらの影響で、昼間には全く勉強ができないのだ。たまには昼間に勉強するのも悪くない。

英語のワークを解きにかかる。いわゆる予習というやつだ。説明文を読めば、ある程度理解できた。解ける問題を全て解く。わからない問題は今度の授業で解けるようになるだろう。

数学のワークを開始する。予習しておくべき箇所は、すでに昨日の段階で終えていた。

古文のワークを開始する。そもそもワークが存在しない。

物理のワークを開始する。少し公式を忘れていたので苦労したが、それでもすぐに十ページくらいは解いてしまえる。

あれもこれも、とワークを解いているうちに、とうとう夏鈴が帰ってきた。

「おっ兄ちゃん！」

バタバタと階段を上がってきているうちに時間を確認する。よし、まだ夕食の準備はしなくて大丈夫そうだ。

盛大な音を立てて部屋のドアが開く。

老人ホームでのボランティア帰りだというのにもかかわらず、夏鈴に疲労の色はうかがえない。むしろ元気そうに見えた。

「おかえり。お疲れさん」

飛び掛ってきた夏鈴の頭を撫でながら——最近撫でることが多くなったように思う——ぼくは言った。

幸せそうに目を細める夏鈴は猫のようで、それが面白くて、なんとなく頬をつつく。意味は特にないけれど、無性にやりたくなったのだ。

「ただいまー。疲れたよー」

元気そうだけど、疲れてはいるんだな。当たり前だけど。

「どうだった？」

「疲れただけだよ。お年寄りって苦手なんだ」

「苦手なのか？　なんか意外だな」

「妙に親しげに話しかけてくるでしょー？　ああいうのって、なんだか嫌なんだよね。対応に困っちゃう」

「適当に返事してるだけでもいいと思うぞ？　まあ、苦手っていうのは分かるかな。ぼくもそうだ」

「お兄ちゃんは同年代以外の人は苦手でしょ？」

「失礼だな。ぼくが駄目なのは、小学生低学年以下とご老人たちだ」
「へー」

どうでもよさそうにうなずく夏鈴。正直どうでもいいのだろう。

夏鈴はぼくの体から離れ、ベッドに移動した。ベッドに腰掛ける

のかと思ったら、そのまま横になった。

「ちーかーれーたー」

大の字になって間延びした声を上げる。いつまでも子どもっぽいやつだ。

「頼むからそのまま寝ないでくれよ？」

「わたしが寝たら、お兄ちゃんもわたしの部屋で寝るといいよ」

「嫌だよ。ふつうに夏鈴を部屋まで運んでいくからな」

「あ、一緒に寝るっていう選択肢もあるよ」

「ねえよ」

あるわけがないだろ。中学生と高校生だぞ？ それをやったら、多分、ぼくは社会的に死ぬる。まず間違いなく『あいつら』はぼくを抹消しようとするだろう。それだけは勘弁願いたい。

「照れちゃってもー」

「照れてない。それに、まだ晩飯もまだだろ？」

「あ、そういえば」

「そういえばって、まだ夕方だぞ？」

「あれー。そだっけ」

「お前、よっぽど疲れてんだな。いいよ、もう。そのまま寝てろ。できたら起こしに来るから」

「ありがとー」

今まで我慢していたのか、夏鈴は返事をするらずぐにまぶたを下ろし、まどろみに落ちていった。

「ったく」

とりあえず夕食を作ってしまったわけじゃない。早めに食べて早めに寝かせてしまおう。そうすれば明日にはまた、元気に活動できるだろう。

「どうしてぼくが夏鈴の健康状態まで気にかけなくちゃいけないんだ」

もう自分でどうにかする年齢だろうに。たぶんあの子どもっぽさが、ぼくを過保護にしているのだろう。本当に過保護なのかは疑問

だけど、自分はそうだと思っている。

今日は全く何を作るかを考えていない。買い物にも行っていないし、冷蔵庫に何が眠っているのかもあまり覚えていない。あまりよろしくない状況だ。冷蔵庫を確認してみると、中には料理に使えそうなものはほとんど入っていないかった。野菜も同じ。そろそろ買い足しをしておかなければならない。夏鈴に頼んでおこう。さて、冷蔵庫に何もなければ、別の方法を模索しなければならない。どうしようか。

少し考えて、ぼくは人が考え出した便利アイテムを思い出した。カップラーメン、カップうどん、カップそば、カップ焼きそば、日本にはそんな便利な食べ物がある。幸い、葵家にも在庫はいくらか存在していた。たまには手を抜いてしまってもいいだろう。誰も文句は言わないはずだ。いや、言わないでくれ。

とわいえ、メニューがカップ麺となると、通常の料理に比べ準備にかかる時間は皆無に等しい。これでは夏鈴の仮眠の時間は十分ではないだろう。それに、ぼくの胃袋も食べ物を欲してはいない。とりあえず本でも読んで時間を潰すことにしよう。

計画性のない兄でごめんなさい。

起きてきた夏鈴は、食卓に並べられたカップ麺に一瞬動きを止めながらも、「お兄ちゃんも大変だよー」と、嫌な顔ひとつしなかった。できた妹で助かる。

「それにしてもカップラーメンって久しぶりだねー」

「そうだな。実は材料が色々足りなくてね」

「お兄ちゃんにしては珍しい失敗だねー」

「ああ」

ぼくも人の子、ということだ。まあ、そんなことを言うほど飛びぬけた存在じゃないけど。飛びぬけた存在、といえば夏鈴のほうだろう。それもあまりいい方向じゃないけど。『恐怖』とか『危機

感』の欠如、というのはあまりに飛びぬけてしまっているように思う。ぼくだけだろうか。違うと思う。いや、実際に見てみないとわからないか。

雨は少しだけ小降りになっていて、明日には晴れそうだ。ただ、そうなると霧が発生しそうで憂鬱になる。晴れれば時雨がやってくるだろう。どうやって追い返したもののか。自然かつ迅速に。考えてもすぐには出てこなかった。

今回はぼくが食器を片付けることになった。自然かつ迅速な時雨の追い返し方は全く思い浮かばない。以前、「これから出かけるから」と断ったことがあったが（実際出かける予定だった）、時雨はそれについてきたのだ。だから外出系の断り方はNG。実際に出かけるわけじゃないから（出かけたらより危険だから）、それは失敗したときのリスクが大きい。病院に行く、というのは明らかに嘘だとばれるだろう。家でゆつくりしたい、なんてのはもってのほか。隙がない。

「外に出られないから、な」

時雨が家に来る前に家から出てしまっ、という選択肢も選べない。居留守、というのは何度かやって（女の子と遊ぶのに少しばかりの抵抗を感じる年頃るとき）、全て看破され、二階の窓から部屋に入ってきたくらいだ。もはや逃げる手段より、別の方法を考えたほうが早いように思う。しかしそれができるなら、ぼくはすでにそれを実行し、今こうして悩むことをしていないはずだ。八方塞がりとはまさにこういうことを言う。

「なあ夏鈴」

「いや、わたしに聞いても答えは出ないよ。さすがにわたしにはどうすることもできないって」

「……だよな」

全てを見透かしたようなことを言っているが、多分見透かしているのだろう。夏鈴という妹はそういう娘だ。

ぼくはぼくだけで、ぼくの力でどうにかしなければいけない。

とりあえず、寝よう。

どれだけ異質だ、と言ったところで、しかしぼくたちにとってそれは当たり前のことだ。一生付き合っていかなければならない、もう一つの『自分』のようなものだ。だからそれを否定されてしまうのは、自分自身を否定されているのに近いものがある。だからといって、ぼくたちがソレを肯定しているのかといえば、それは限りなくノーに近いだろう。誰だってコンプレックスというものは持っている、それを肯定し魅力だ、と言える人はいない、もしくは限りなく少ないはずだ。ぼくたちの異質はつまり、そういう部類だということをおきたい。

ぼくは破壊衝動。

夏鈴は感情の一部欠如。ブラコン（これは性格だと思いたい、いや、それも困るが）。

時雨は虚構の創造。

一番実害があるのがぼく。

一番厄介なのが時雨。

夏鈴はそれほど害もなければ、厄介でもない。自身が気をつければ済む話だ。

ぼくは素直に言って後悔している。今まで綺麗事ばかりを並べてきたが、それは保身のために過ぎない。そうしないと、自分の心が壊れそうだからに過ぎない。

詭弁だ。

これはぼくの回想。普通に生活していた頃の、昨日までの回想。感謝の気持ちをぼくに関わった人全てに示そう。

謝罪の心をぼくに関わった人全てに示す。

一緒に歩いた『彼女』の冥福を祈る。

今日でぼくたちは終わった。

さようなら、とは言わない。

目が覚めて、まずしたのが天気の確認だった。カーテンを開けると、濃い霧が立ち込めていて、体の奥が疼くのを感じる。時計を見ると八時を過ぎていた。夏鈴はもう学校に行っている時間だろう。ということは、もしぼくがああ『発作』を起こしたとしても、止めてくれる人はいないということになる。全力で抑えなければならぬ。

「時雨が来なかったらいいんだけど……」

願ってみても、彼女が来ないわけがない。雨が降っていようが、風が強かろうが、日差しが強くても、寒くても、暑くても、彼女はやって来る。濃い霧が出ていることくらいで来ないがわけがない。どうにか対策を講じなくてはならない。

ぼくと時雨のために。

とりあえず朝食を食べようと部屋を出たとき、玄関が開く音がした。

「おっじゃまー」

聞き違えるはずがない。時雨だ。どたどたと階段を駆け上がってくる。これでは対策も何もあったものではない。昨夜にちゃんと考えてから寝なかった自分を殴ってやりたい。むしろ、こうなることを予測できていたにもかかわらず、眠りにつけた自分に感服する。

「どうしたの？ 顔色悪いね。ははっ、さては部屋の中にはアダルトウーな本が散乱してて、あたしに部屋に入られるとまずいとかそんなわけがない。あるわけがない。そういうお気楽な妄想をしてくれるのは、切羽詰っているぼくにしてみればありがたい話なのだけど、今にもその気楽な笑顔を殴ってしまいそうになる。今すぐに逃げ出したい状況だ。」

混乱のあまりどういう風に対応したらいいのか分からない。

あまりにも急すぎる。心の準備が（する時間はあつたけど）全く

できていない。神さまなんてものが本当にいるなら、そいつはきつと相当性格が悪いに違いない。どうしてこんな状況を創りだすというのだ。迷惑を考えてくれ。いや、むしろこれを迷惑だとは思っていないのだろう。迷惑という概念すらないに違いない。それ以前に、全ての人間のことなんて気にもかけていないだろう。

「むー、本当に様子がおかしいね。朝ごはん食べた？」

「これから食べるところ」

なんとかそれだけを返す。気を抜いたらすぐにアレがくる。

「そっか、じゃあ冬麻は部屋に戻ってて。あたしが準備して持つてくるから」

それは困る。それをするということは、運んできた後も部屋にいて、食べ終わった食器をも片付けていくということだろう。看病する気満々ではないか。そうなると、ぼくと時雨が一緒にいる時間が増える。増えるということは、アレに遭遇する確率も高くなる。

「大丈夫だよ。食べて寝たらよくなるから」

「むー、そっか。じゃあ、今回のところは退散しようかな」

「うん。またね」

「であであー」

騒がしく登場し、騒がしく去っていった。

「ふう」

とりあえず時雨が家から出て行ったことに嘆息する。それと同時に、自分のこの体質に嫌気がさしてくる。こんな迷惑極まりない性質など、今すぐに破棄したい。

食卓には空の椀が二つ置かれていた。それにご飯と味噌汁をつぐ。意図して普段と同じように、同じような速度で食べた。けれど、気が気ではない。この霧がいつ晴れるのか、一日中我慢し通せるのか、そんなことばかりが頭を巡る。

こういう事態は初めてではないけれど、その度にいつもこんなことになっている気がする。学習能力がないのか、ぼくは。少しは学習しろよ。勉強ばかりできたって駄目なんだ。

とりあえずどうしようか。この状況では出歩くことは正しく自殺——もしくは他殺——行為だし、前のように勉強をしようとしたところで、集中ができるはずがない。『霧が出ている』という事実を認識してしまっている以上、この体の疼きが収まることはないのだ。この霧が晴れたのを確認するまでは。

と、ここまで考えて、では朝に天気の確認さえしなければこんなことにはならないのではないのか、というところに行き着く。しかし、それをしてしまうと、霧が出ていることを知らないままに外に出してしまう。外に出れば霧を認識する。つまり、確認しようがしまいが、それは同じことなのだ。結局は疼きが現われる。『発作』の兆候が現われる。

「……寝よう」

寝てしまえば、自分の意志なんて関係ない。寝てしまえば、例えば鼻づまりによる息苦しさを意識しなくなるのと同じように、あの疼きを意識しなくて済むだろう。寝てしまおう。寝てしまえば楽になる。

食器を簡単に洗い、部屋に向かう。足取りは重かった。

最悪の気分だ。

何かの気配を感じて目が覚めた。『何か』のほうへ目を向ける。

「……夏鈴。帰ってたのか」

ぼくを見下ろすように、夏鈴が立っていた。

「たっだいまー。お兄ちゃんすごいねー。わたしが帰ってきた途端に起きたよ」

本当にそうなのだろうか。ぼくにはもつと以前から立っていたように感じるのだが。何か不気味な感覚がある。しかし、今の夏鈴にはそんなものは皆無だった。

「お兄ちゃん、もう一時だよ？　いくらなんでも寝すぎじゃない？」

「ちゃんと朝ごはんは食べてるよ。寝てたのはアレから逃げるため」

「あー、そっか。気づかなくてごめんね」

「いいよ。それより夏鈴、ここにいるのは危ないと思うよ？」

「えー、妹が兄の部屋にいるのが危ないの？」

「そういうことじゃなくて」

わかつているはずなのに。

「大丈夫だよ。お兄ちゃんが前みたいに暴れても、わたしが止める。わたしが止めてあげる」

「でも……」

「いいのー。あ、でもわたしにも仕事はあるからねー」

夏鈴はそう言い残して部屋から出て行った。恐らく昼ごはんを食べるのだろう。今帰ってきたばかり、という夏鈴の弁が正しいのならだが。そこを疑ってしまったては、兄としての立場がない。

目覚めてしまえば、またあの疼きを体感する。意識していないだけで収まるわけではない、ということを感じする。

「いやっふー！」

突然ドアが開き、時雨が飛び込んできた。

「元気になったー？」

「時雨、どうして」

「えー、だって朝来たとき元気なかったしさ。心配するじゃない？心配してくれるのは素直にうれしいが、できれば今日は来てほしくなかった。」

「それにさ、『今回のところは』ってちゃんと伏線張ってたよ？」

やっぱりあれはそういう意味だったのか。気づいたものの、いやそれは考えすぎだと打ち消していたのに。そうだ。この娘がその手の伏線じみた言葉を冗談で使うわけがないのだ。やはり、昨日今日のぼくは油断が過ぎる。

「うん。でもまあ、顔色が良くなって良かったよ。朝は真っ青だったけど、今は少し赤みがかつてるし」

それはぼくが望んでいない興奮がわいてきているからだ。破壊衝動が奮い立っているからだ。一刻も早く時雨をこの部屋から、いや、この家から出さなくてはいいけない。

「時雨——」

悪いけど、帰ってくれ。そう言おうとして、けれど言えなかった。そのとき、時雨が取った行動が、最悪のものだったからだ。

「む？　かなり空気がこもってるねー。これじゃあ、健康でも病気になるって冬麻」

そう言って、彼女はカーテンを開けて窓を全開にしたのだった。

嫌でも、

霧が——

視界に入る。

「時雨っ！」

「え？」

窓に手を掛けたままの時雨は、突然のぼくの怒声に目を見開き、ぼくのほうを見た。開け放たれた窓からは、霧の町が見える。

瞬間。

ぼくの体を、あの日の狂気が支配する。

あの男から乗り移ってきたかのような、凶暴な殺意が、ぼくの中から溢れ出す。

ぼくは時雨を殺したくはない。絶対にだ。

けれど、それ以上に時雨を、いや、この視界に映るすべてを破壊したい。

意識が反転する。

気がつけば、時雨の頭を殴っていた。

気がつけば、ハサミを持っていた。

気がつけば、それを時雨のお腹に刺していた。

気がつけば、もう一度ハサミを刺していた。

気がつけば、時雨の苦痛を訴える悲鳴が部屋を包んでいて、誰かが駆け上がったて来る音が聞えた。

そこで——夏鈴の登場でぼくは我に返る。一度傷つけてしまった夏鈴を、いや、何度も傷つけてきた夏鈴を、ぼくは、この凶暴なぼくは忌避しているらしい。見境のない狂気かと思えば、そうではな

いようで。人の心とはまったくもって理解に苦しむ。

とにかく、ぼくはやつとの思いで、体と意志の自由を取り戻した。ぼくによりかかるように倒れてきた時雨の体を支えて、ベッドに倒す。まだ息はあるし、意識もある。驚愕に染まった顔でぼくを見つめる。

「……と、う」

「救急車を呼ぶなら、ここに携帯がある。意識があるうちにかけるといい」

時雨の手に携帯を握らせる。そこへ、夏鈴が部屋に入ってきた。

「お兄、ちゃん……？」

「ああ、夏鈴。行こうか」

「行こうかって……時雨ちゃん血まみれだよ？」

怯えたような目でぼくを見る夏鈴がかわいそうになる。それと同じに、夏鈴にもこんな表情が残っていたのだと安心する。こればかりは、あの達観したように、全てを知っているかのような夏鈴でも想像できなかったのだろう。

それはそうだ。夏鈴だって人間なのだから。

「夏鈴、時間が無いんだ。これから苦労かけるかもしれないけど、行こう」

「なに言ってるの……？ わからないよ」

ぼくが一步近づくと、夏鈴は一步下がる。それを繰り返していくと、とうとう夏鈴は壁に後退を妨げられた。いやいやと首を振り、涙を流す夏鈴を見ると心が痛んだ。

「どこか、ここじゃないところ。大丈夫だよ、夏鈴」

「何が大丈夫なの？ ねえ！ 早く救急車呼ぼうよ！」

叫ぶ。けれど、ぼくはそれに耳を貸さない。貸してはいけない。それになにより、ぼくは警察に捕まりたくなんてない。

「心配しないで」

滅茶苦茶に振り回される夏鈴の腕を掴み、優しく、できるだけ優しく夏鈴の頭を撫でた。振り回されていた手が止まる。ぼくは一步、

歩いた。夏鈴もそれについてくる。

時雨に小さく手を振って部屋を出る。

「ねえ、時雨ちゃんは今？ 救急車呼ばないと死んじゃうよ？ お兄ちゃんが刺したんでしょ？」

ぼくの異常性を知っている夏鈴にとって、それは考えるよりも明らかなことだ。だから、ぼくは素直にうなずいた。隠す必要なんて何一つとしてないのだから。

ぼくの手を握る夏鈴の手は大きく震えている。ぼくはそれに気付かないフリをしながら歩いた。この妹は、あの不思議な側面を持ちながらも、まだ中学生だ。いくらぼくがあのような狂気を潜ませていることを知っていたところで、実際に人を殺して——まだ死んではいないから……違うか。そう、傷つけてしまったとなれば怖くもなるだろう。そうでなければ、ぼくは本気で夏鈴の心を疑う。

外に出ると、濃い霧が世界を覆っていて視界が悪かった。よくもまあ、こんな状況で学校の清掃活動は行われ、時雨はぼくの家に来たものだ。交通安全について、もっとよく考えたほうがいいのではないだろうか。特に中学校。

「兄ちゃん……こんな日に散歩して大丈夫？」

それはぼくの破壊衝動のことを言っているのだろう。けれどぼくはそれを無視して歩く。どうせ既に時雨を傷つけてしまったのだ。しかも、その後のケアも、責任も何一つ果たさずにこうして逃げている。今更そんな心配などする必要はない。それに、なぜか裏側のぼくは夏鈴を傷つけないようになっていようだし。

冷たい風。温かいけれど、恐怖で冷たくなっている夏鈴の手。それらの調和が心地いい。

「時雨……ごめん」

逃げてしまつて。

「時雨——ありがとう」

何がありがとうなのか、ぼくにはわからないけれど。

気がつく、なぜかハサミがあたしの体に刺さっていた。

「ひぎいいいいいい！」

こんな悲鳴なんて初めて聞いた。

痛い痛い痛い！

どうしてなんであたしが冬麻に刺されなくちゃいけないの？ ね

え、どうして、よ。

「……と、う」

声が出ない。痛みで気が遠くなりそう。早く救急車呼んでよ……

…。

「救急車を呼ぶなら、ここに携帯がある。意識があるうちにかけるといい」

そう言つて、冬麻はあたしに携帯を握らせる。

え？

冬麻は、部屋に駆け込んできたブラコン妹と何かを話していて……。まさか、あのブラコン妹……いや、違う。あいつは怯えたような顔で何かを叫んでいた。

何を言っているのかはわからない。遠ざかる意識を無理やりコッチに引き留め、携帯をプッシュするのに必死だ。あたしはまだ死にたくない。

冬麻に理由を聞きたい。

全校親交部のみんなと別れるのもいやだ。

あたしにはまだまだやり残したことがある。

冬麻と一緒にいたい。今度は自分の妄想じゃなくて、現実として彼に刺されてこうなっているというのに、その気持ちに変化はない。それほどまでに、あたしは彼のことが好きだ。

そう。きつとこれは何かの間違いだ。今日の冬麻は体調が悪かった。だから、虚ろな思考の中で、何か良くないものが見えに違いない。そうでなければ冬麻があたしを刺すはずがない。きつとそ

うだ。

冬麻が部屋から出て行く。階段をゆっくり下りていく音が聞える。やっこの思いで通報する。

「もしもし」

しかし、プッシュするのが精一杯。脂汗だらだらである。

「もしもし」

力が入らない。

電話の向こうの様子が少し変わる。

「大丈夫ですかっ！　もしもし！」

「たす……けて」

声が出た。けれど、自分のものとは思えないほどに掠れていた。視界がかすむ。血が足りていないのだ。力も入らなくなってきた。

「――」

携帯の向こうから何か声が聞えるが、あたしにはもう届かない。かすんでいく意識の中で、あたしは冬麻の姿だけを考えていた。

気がつけば、真っ白な箱の中にいた。そこが病院の病室だと気づくには数瞬を要した。どうやらあたしは助かったらしい。

「あつ、意識が戻ったんですね」

看護師さんがうれしそうに目を細めた。

「先生を呼んでくれますから、横になっていてください」

体力が著しく低下していて、あたしは返事をするのもうなずくこともできなかった。する気力さえ生まれなかった。ただ、生きていた。助かったのだ、という感動だけをかみ締めた。

当然のように警察がやってきた。

「あくまで事件性はないと？」

刑事さんの表情には、明らかな不審が浮かんでいた。そして困惑もつかがえる。

「はい。あたしは確かに彼に刺されました。けれどあたしはこれを

事件として扱って欲しくないのです」

「しかし、これはれっきとした殺人未遂、もしくは傷害事件です」

「いいえ。今回のこの件は和解しました。法的措置は一切合財必要ありません」

「和解、と言つても、犯人は、葵冬麻は現場から即座に逃走したのでは？」

「そのとおりです。しかし、被害者の立場であるあたしは、被害を被ったとは考えていません」

「言い方が単刀直入で申し訳ないが、霧埼さん。あなた、死にかけているのですよ？ 発見がもう少し遅れていたら死んでいた」

「ええ。先生から聞きました。しかし、あたしは死んでいません。死んでいない以上、あたしにはこれは事件ではないと主張する義務があるのです」

刑事さんは憤りと困惑を交えた表情で、あたしを見つめていた。

退院してすぐ、あたしは旅の支度を始めた。高校なんて続けていられない。

「時雨行っちゃ駄目よ」

「……………」

黙っていてほしい。

「じゃあ」

資金もある。足りなくなってきたら短期でバイトをすればいい。

そんなに甘くはないのだろうが、あたしには関係がない。

「人に頼るだけっていうのは、あたし嫌いなもの」

警察だって捜しているのだろうけれど。

「みいこちゃんだって、そうでしょ？」

「そうですね。夏鈴さんを許せるかどうかはわかりませんが」

「ゆっくり考えなよ」

「そうすることにします。……………そうですね、時雨さんほど寛容にはなれませんから、二、三回殴って許してあげましょう」

みいこちゃんはそう言つてうなづいた。

「みいこちゃんも、かなり変だよな」

「『彼ら』は結局、自分たちがすることに怖気づいて何もしませんでしたからね。むしろ、哀れみでなのか、丁寧な介抱をしてくれましたから。それくらいで許してあげなくもないですよ」

「そっか。何箇所か心辺りがあるから、まずはそこへ行くよ。どこもこの町からは離れてるけどさ」

「絶対、連れ帰ってくださいね」

たとえ辿り着けなくても。

「もちろん。みいこちゃん、待っててね」

これがあたしの出した答えだ。

完璧な作戦だ。時雨ちゃんがこの時間にやってくるということは知っていた。家から帰ってくる途中で、たまたま見かけたのだ。だから、決定的な時間にわたしがお兄ちゃんの部屋にいなければ問題ない。そうすればお兄ちゃんのアレが始まる。

時雨ちゃんはほぼ時間通りにやってきた。わたしは来たことに気づかなかつたふりをして、学校行事のせいで食べ遅れた昼食を食べている。上で話し声が聞える。お兄ちゃんの緊張した声。でも時雨ちゃんはそれに気づけないだろう。お兄ちゃんはアレで演技上手だ。ずっと自分とわたしの異常を隠し続けてこれたのは、ひとえにお兄ちゃんの力だ。

「時雨っ！」

来たっ！

本能的にわかる。あの声はお兄ちゃんが本当に余裕のないときに出す声だ。ということは、アレが始まる。あたしはまだ行く必要はない。行つてはいけない。まだ早い。

「ひぎいいいいいい！」

時雨ちゃんの醜い悲鳴が響いた。これだつ。わたしが待っていたのはこの声だ。何も知らないふりをするために、今のこの興奮した気持ちを隠さなければならぬ。深呼吸して気持ちを落ち着かせ、階段を駆け上がる。これで上気した頬も誤魔化せるだろう。

「お兄、ちゃん……？」

予想通りの景色が、お兄ちゃんの部屋に広がっていた。ただ、一つ問題なのは時雨ちゃんの息がまだあつて、意識が思ったよりもハッキリしていることだ。これではせっかく机の上にハサミを置いていた甲斐がないではないか。

「ああ、夏鈴。行こうか」

お兄ちゃんの優しい声。

この声、久しぶりに聞く。いつ聞いてもいい声だ。

「行こうかつて……時雨ちゃん血まみれだよ？」

一応普通の反応を示しておかなくてはいけない。

「夏鈴、時間が無いんだ。これから苦労かけるかもしれないけど、行こう」

「なに言ってるの……？ わからないよ」

わからないわけがない。これはわたしが全て仕込んだことなのだから。かなり長いスパンの計画だったが、今のところは滞りない。

お兄ちゃんが哀れむような顔でわたしを見下ろしている。ああ、あたしは悲しみの感情が欠落している、という設定だったか。だから怯えるわたしを心配してくれているのだ。これはいい。そんなまさか、本当に悲しみの感情が欠落していると信じてくれていたなんて。お兄ちゃんは、あたしの異常の認識を根本的に間違っている。

「どこか、ここじゃないところ。大丈夫だよ、夏鈴」

「何が大丈夫なの？ ねえ！ 早く救急車呼ぼうよ！」

呼ばれてたまるものか。そんなことをしたら時雨ちゃんが生き残ってしまう。この女には死んでもらわないと。

お兄ちゃんの手が、時雨ちゃんの血で濡れた手があたしの頭の上

に置かれる。

「心配しないで」

「ねえ、時雨ちゃんは今？ 救急車呼ばないと死んじゃうよ？ お兄ちゃんが刺したんでしょ？」

絶対に呼ぶな。呼ばないで。呼ばないでください。

お兄ちゃんは結局、救急車を呼ぶことをしなかった。勝った。

これで確実に霧埼時雨は命を失う。そうすれば、お兄ちゃんはわたし一人だけのもの。お父さんもお母さんも、誰のものでもない。わたしだけのもの。もちろん、みーちゃん。彼女にも渡さない。まあ、みーちゃんも今頃は橋の下で冷たくなってるんだろけど。みーちゃんかわいいからね。そこらへんの男をそそのかしちゃえば簡単に終わる。でも、みーちゃんにも手をかけなくてはいけないかったのは、正直残念で仕方ない。みーちゃんがあんなことさえしなければ、わたしの予想は確信に変わることはなかったというのに。つくづく残念で仕方ない。

わたしはすでに銀行から預金を全て下ろしている。お金にはしばらく苦労しないだろう。お金がなくなったら、どこから盗めばいい。今までも、何度かそれで小遣いを得ていた。

笑いたくて仕方ない。狂おしいほどに笑いたい、わたしは勝負に勝った。

お兄ちゃんは今わたしの——わたしだけのもの。

これからは霧の日だろうがなんだろうが、ずっと一緒だ。お兄ちゃんの狂気なんて、全く問題じゃない。あの程度の狂気なんて、わたしの悪意に比べればなんでもない。

比べるまでもない。

あの日。わたしとお兄ちゃんが、あの忌々しい男に襲われたその日から、わたしの計画は始まっていた。

それも今日で終わり。

そして新しい始まり。

「お兄ちゃんは、わたしのものだよ？」
誰にともなく、わたしは呟いた。

笑いたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3344k/>

視野2メートルの想い

2010年10月8日14時30分発行